座談会：西田美昭教授の研究をふりかえる

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西田, 美昭 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/10734

座談会

西田美昭教授の研究をふりかえる

――共同研究を中心に――

（語り手）　西　田　美　昭

（聞き手）　加瀬和俊，鈴木邦夫（司会）

岩本純明，北河賢三

清水洋二，伊藤正直

大門正克，安田　浩

川口由彦，花井俊介

永江雅和，山口由等

はじめに

加瀬（司会）　本日はお集まりいただきまして，ありがとうございました．最初にこの座談会の趣旨説明をさせていただきます．西田さんは1940年のお生まれですので，2001年3月に定年退官されますが，社会科学研究所では退官教官の研究回顧の座談会を行って，それを研究所の紀要である『社会科学研究』に掲載するという制度がございます．本日はこの制度に則って，社研に1974年に赴任されて以来の西田さんの研究を回顧するという趣旨でお集まりいただきました．

座談会のテーマとしましては，西田さん御本人とも相談しました結果，主として共同研究の歩みに即して検討することとしました．個人研究の検討はある意味では何時でもできますが，共同研究をめぐる議論は，多数の方々が関係しているために，こうした機会がありませんとできにくいからです．

西田さんが中心になって実施してこられた共同研究を回顧することは，学問的にもかなり重要な意味があると思われます．といいますのは，共同研究，特に農業史における共同研究が今日非常に少なくなってまいりました．それは農業史をやっている人たちが少なくなったということもありますし，客観的理由によって共同研究が困難になってきたといったこともあると思います．そういうなかで一貫して共同研究という研究スタイルを，自分の研究の中心部分に据えてこられた西田さんの役割を明らかにするという意味で議論を進めてみたいと思います．それは西田さんが常々言っておられるように，限られた論点を実証する材料として資料をつまみ食い的に利用するのではなくて，残されている資料総体を読み込んで分析するためには，共同研究という研究スタイルがどうしても必要であるという強い方法的自覚と関わっています．この手法を身をもって展開してこられた西田さんの学問上の役割を明らかにするという点で，皆さんの議論をお願いします．

今日，実証研究の分野で共同研究がしにくくなっている客観的な根拠はかなり多いと思われます．旅費の調達難，長期間にわたる共同研究

を実施するため時間をそろえることが難しくなったこと，あるいは短期的な業績が要請されるようになったことといった状況があると思います．そういうなかでも長時間，長期間をかける共同研究を一貫して続けることができた背景には，独自の工夫，努力があるでしょうし，それに参加した参加者めいめいの想いもあるでしょう．そういうものを今後のために記録しておくこともこの座談会の役目になるかと思われます．それでは，さっそく西田さんから，共同研究を中心にして御自身の研究回顧をお願いします．

西田　きょうは大勢の方に集まっていただきありがとうございました．何から話そうかなと思ったのですが，一つはなぜ農業問題というか，農業史に私は関心を持ったのかということと，最初の私が主催した共同研究の成果である『昭和恐慌下の農村社会運動』を作ろうと思った動機，この2点について，お話ししたいと思います．

私は東京生まれの東京育ちで農村の生活者ではなかったわけです．しかし，一つは私の母の実家が茨城県西茨城郡岩瀬町字長方というところなんですが，純農村でありました．それで戦争末期の東京の空襲の時期に，そこに疎開していまして，それが縁で夏になると必ず，大学生になってもそうだったのですが，そこに1カ月ぐらい滞在する，岩瀬町の子どもたちと楽しく遊ぶという体験がありました．

しかし，それだけでは農業問題をやろうなどということにはならなかったのは当然なので，一番大きかったのは私が大学に入ってからのことです．大学に入るまでは，経済学部を選んだ理由は私のおやじが私のことを商社に入れようと思っていて，私のほうも経済学部だったら，遊んでいても卒業できるだろうという安易な気持ちで，経済学部を選んだのですが，入学した年が1960年だったんです．つまり1960年安保の年でした．入ったとたんに授業がない．私のほうはちゃんと教室に行っていたのだけれども，先生が来ない．先生のほうは「なんでおまえたちは教室にいるんだ．これから国会に行かなくちゃいけないのに」という雰囲気でしたから，私は全くのノンポリでしたけれども，自治会運動に参加することになりました．

例の6月15日のときには，どういうわけか頭を割られて，血だらけですから，つかまる可能性があるので，つかまらないように鎌倉の寮まで逃げ帰ったことを覚えています．結局，6月15日はそういう事件があったのですが，6月19日に改定された安保条約は，自然成立してしまいます．その夏，どうするかということで，この安保条約がいかに日本の国民，民衆のためにならないのかということを，それぞれ自分のくにに帰って，説得する運動をしよう，いわゆる帰郷運動というのをやりました．

私が行ったのは当然，茨城県の長方で，そこで私の知っている農民，農家の人とずいぶん議論というか，こちらから議論を吹っかけるのですが，あまり相手にしてもらえなかった．それで，「この安保条約の改定を推進している自由民主党なんかに投票したら，農家にとっては農産物の自由化もどんどん進むし，ろくなことにはならないんだ」といくら説得しても，「昔から自民党に入れているのだから，おまえの話なんか聞かない」とほとんど相手にしてもらえなかったというのが大きな体験でした．

つまり，なぜこんなに農村にとってためにならない安保改定に反対しないんだろう．言葉を換えて言えば，なぜ農村はこんなに保守的なんだろうというのが，私の率直な疑問で，そのことが農業問題を少しかじってみようかなと思うようになった一番大きな原因だったと思います．

私は横浜国立大学経済学部だったのですが，経済学部では農業経済学という講義と日本経済史という講義を，非常勤で来ていた細貝大次郎先生がやっておられたので，そこに押しかけていって，強引に先生に頼んで，宮城の農村や新潟の農村に連れていってもらいました．そして，親は大学院に行くなんていうのは絶対反対だったわけですが，もう少し農業問題を勉強したいということで結局大学院に進学しました．

大学院に進学して，問題意識としては現状の農業問題をやりたかったのですけれども，古島敏雄先生と永原慶二先生が指導教官で，一橋に

古島先生は併任で来られていた．その指導を受けて，実際にもっと歴史的に研究する必要があるのではないかというアドバイスを受けました．問題意識はわかるけれども，直ちに現状分析をやる方法もあるけれども，歴史的にきちっと君の問題意識を生かしながら研究する方法もあるんだということを強く言われました．

それで，歴史研究，農村史研究というか，農業史研究に入って，具体的には小作争議の分析をやったわけですが，大学院時代に，この著作目録でいきますと，「小農経営の発展と小作争議」，これは三升米事件という新潟の小作争議で，2番目のは英村という山梨県の小作争議で，3番目のは北海道の蜂須賀農場争議の分析ですけれども，そういう論文を書きました．

それと並行して，永原先生のところでは学生と一緒に農村調査に山梨に毎年行っていたんです．私もそれに一緒に連れて行ってもらいまして，学部学生は学部学生独自で「ヘルメス」という雑誌に調査の成果を出すんですが，それがきっかけで，『日本地主制の構成と段階』，永原先生をはじめ4人の共著ということになっていますが，これが私にとっては最初の共同研究体験だったと思います．

あと助手時代というのは，組合運動ばかりやって怒られた．怒られたというのは，一橋に初めて特別研究員制度というのができて，私はその第1号なんですが，特別研究員制度は組合活動をやるために作ったのではないと言われました．永原先生は「そういうことを言う先生が教授会でいたけれども，私はそれには反対した．だけど，そういうことを言う先生がいるということは頭に置いておいてもらいたい」と言われました．

それから，高崎経済大学時代は一時，一橋で非常勤講師というかたちで行って，森武麿君や田崎宣義君たちと群馬県の芳賀村の役場資料について，これは膨大ないい資料なんですが，共同研究をやろう，共同調査をやろうということでやりました．これは一つの本にまとまるところまでは行かなかった．しかし，森君の処女論文である「日本ファシズムの形成と農村経済更生運動」が生まれました．

それで社研に来たわけです．社研に来たら，加瀬君や今日ここにいるメンバーが多いわけですが，私の論文を片っ端から一つひとつ検討するというゼミを1年半ほどやりました．ですから，そのときに私は厳しい批判の対象になってガンガンやりあいました．年も10歳と離れていない者同士ですから，私にとっても勉強になりました．

そして，そういう議論をしていくうちに，どこかフィールドを決めて分析しようということになった．お金もないことだったので，清水君の実家が上田市で泊めてもらえるということと，それから，西塩田村は長野県の三大小作争議だということぐらいしか，たぶんわかっていなかったと思うんです．でも，そこを調査してみようということで始めたのが1975年の夏のことでした．これは1978年の暮れには本になっている．今から見てもかなり緻密な本だと思うんですが，（笑）それにしてはずいぶん短期間，一番短期間でできあがった本になったんです．しかしこれはかなり丁寧に作ってある本です．

きょう参加されている方が多いので，私ががたがたあまり言うよりは，皆さんに言っていただいたほうがいいのではないかと思います．

1．『昭和恐慌下の農村社会運動』（御茶の水書房，1978年12月．執筆者　西田美昭・加瀬和俊・清水洋二・田崎宣義・出井善次・大島栄子・北河賢三・赤沢史朗・鈴木邦夫・岩本純明）

西田　まずこの本の特徴としては，きょう来ておられる北河君と赤沢史朗君は政治思想史の専門家で，この二人が入ってくれたので，政治思想史と経済史分析の接合をすることができたのではないかということが一つです．第二に当時の状況からいけば，本格的な戦間期研究がはやってき始めたころで，農村での戦間期研究の走りではないかと思っています．これは大江志乃夫さんたちの『日本ファシズムの形成と農

村』や安田常雄さんの『日本ファシズムと民衆運動』とある意味では同じ流れのなかの作品です．違うところは，われわれのものは同一地域を対象とした緊密な共同研究を組んだということで，そのことがこの本の一番大きな特徴になったのではないかと思います．

もちろんこの本に対する批判はいろいろありました．一つは私がやった地帯区分論についての批判です．また非差別部落の位置付けが弱いのではないかという批判もあった．これはとんでもない話で一番力を入れてやったにもかかわらず，そういう批判が出る．あるいは村落共同体論との関係はどうなのか．それから，私の責任が大きいかと思いますが，中農層に主として焦点を合わせて分析して，その視点から総括するという，その総括のしかたについていろいろ批判が出ました．

鈴木　この本を作り始める前の，ゼミができるころからの話をまずしないといけないと思います．西田さんが1974年4月に東大の社研に着任されて，まもなく私と加瀬さんがゼミを開いてもらえないかどうかということで，西田さんの部屋に行ったんです．西田さんの部屋は比較的下のほうの……．

西田　狭い，ウナギの寝床というところですね．

鈴木　それで行って，いろいろ西田さんの論文の内容についても，これはどういう意味なのか，たとえば，この論文では「農民的改革方式」となっているのに，別の論文では「農民的改革方向」に変えたのはなぜかなど，いろいろ質問して，それで西田さんは「じゃあ，開きましょう」ということで日取りを決め，西田論文を読んでいくことにしたのです．そうしたら，その後に，今度，岩本さんと清水さんと，もしかしたら，品部さんもそうなのではないかと思うんですが，やはり西田さんのゼミに出たいということで話しに行った．それで，第一回目のゼミを開いたときには，少なくとも4，5人はいた．

岩本　そうですね．お互い，全然知らなかった．

鈴木　それで始まって，最初はさっき話が出たように，西田さんの論文を徹底的に批判するという，これをやり始めたんです．そのうち，一橋の田崎宣義君とか大島栄子さんとかがたぶん入ってきて，あと東京教育大の出井善次君なんかも入ってきて，だいたいこの人たちは経済史の人であったんですけれども，その後，北河さんと赤沢さんと影山さんも入ってきました．影山さんはのちに赤沢さんと結婚するんで，お茶の水女子大だったと思いますが，彼女も思想史か何かですよね．

北河　いや，農民運動．

鈴木　そういうふうにだんだんと人数が増えていったんです．ですから，1年後どういう状態になっているかというと，東大の経済学研究科所属の正規のゼミナリステンは私と加瀬さんしかいなくて，それ以外は，あと8人ぐらいいたと思いますが，全部，外の人という，そういうかたちになって，その後，たまたま，清水さんが上田の近く，上田市内ですか．

清水　その当時はすでに市内ですね．

鈴木　上田市内に実家があったので，あのあたりでということで，（笑）調査を．

岩本　加瀬君が資料の当りを付けていたんじゃなかったっけ？　そう記憶をしているけれども．

加瀬　塩尻土地管理闘争史とか，高倉テルの活動とか，そういうたぐいの資料はたくさんあったから，それはある程度勉強していました．それでここらへんに行ったら，おもしろいんじゃないかというようなことを話題にした覚えがあります．

清水　西塩田に決まったのは，加瀬君が事前調査に行って，あたりを付けてきたのが大きかったのかなという気がしています．

加瀬　長野県の産業組合史上の重要人物であった深井功が組合長をやっていた和村が上田市の近くにあって，その産業組合関係の資料を見るために何度も通っていたんです．周辺の村の資料の所在なども多少は調べていたので，そのことを提案したように思います．

岩本　インターカレッジという点では前史が

あるんです．西田先生のゼミが始まる前に東大農学部の大学院で暉峻先生を招いてゼミをやったんです．そのときに赤沢・北河両君が参加していた．その縁で西田ゼミに参加することになったんじゃないですか．暉峻さんのゼミもインターカレッジなゼミだったんです．あのころ，そういうゼミが多かったのかもしれない．

鈴木　加瀬さんはあそこの地域にちょっと関係していた．それと清水さんは上田市に実家があった．もう一つは西沢さんという西田さんが神奈川大学で非常勤をしていた時の教え子の家があの近くですよね．それでクルマ，今でいうワゴンがそこにあったので，それに乗って，いろいろなところを回りましたよね．

西田　運転手はぼくしかいなかった．（笑）

鈴木　その当時は免許を持っているのは西田さんしかいなくて，必ず西田さんが運転をする．それでそのとき持っていった器材は平河のマイクロカメラ．あれを持っていって，いろいろなところで撮影する．そういうようなことをやり始めたんです．

加瀬　かなりあてずっぽうに場所も決まったし，宿代がないから清水さんの実家に泊めてもらい，クルマがないからただで借りたということで，たくさんの人に支えてもらったことになりますね．

岩本　そういう意味では黒坂勝さんとの出会いが非常に大きいのではないですか．自分の関係した行政資料を意識的に残してくれていたわけでしょう．後輩の職員たちに処分しないように強く要請されていたという記憶があるんです．

加瀬　中農層の一つの典型が彼なんです．

岩本　ついでに私の感想を言ってしまうと，西田先生の共同研究にかける情熱がどこから出てきているのかということなのです．西田さんはおもしろいパートをみんな学生に譲って，ご自分は第一章と総括の章，それに地帯構造論をふまえた調査地の性格分析の章を担当している．確かこの本を古島敏雄先生に送ったときに，「30代にして序章と終章しか書かなくなったのか」という意味の皮肉を言われたと聞いたことがあるけれども．そういう意味では西田先生は遠慮をされたのではないか．つまり，この西田先生の教え子たちの中からこういうスタイルの共同研究をやる者は出なかったわけでしょう？

そこには，自分のやりたいことがあって，あまり学生のことを構っていられないという要請が働いているように思う．そうなると，なぜ西田先生があそこまで「裏方」に徹して下さったのかということが気になる．

伊藤　その問題は後で改めて検討してほしいと思います．つまり，西田さんはこれまで，日本における新しい共同研究のスタイルをおれは作り出したんだと何回も言ってこられました．根っからの近代民主主義者で，近代民主主義者の最良の面と，それから，ある面では問題点というか，悪い面が両方あるのではないかと思うんです．そのことが，岩本さんがいまちょっと言われた後継者，次に同じような形での共同研究の組織者が出なかったという問題とも絡んでくると思います．

大門　後継者が出なかったというのは少し語弊があります．ぼくは77年に一橋大学院入学なんですが，77年度の終わりか78年ぐらいから，西田さんの大学院ゼミに出させてもらいました．ちょうど西塩田の共同研究を取りまとめている最中で，すごく刺激を受けたわけです．そのころすでに農業史研究者は少ないと言われていましたが，西塩田の共同研究はぼくから見ると輝いていました．今から見ると，少し過大評価のような気もしますが（笑）．結局，その後，ぼくは森武麿さんたちと岐阜で共同研究をやり，山形でもう一回やって，それから五加村でもまた西田さんと一緒にやるわけです．

関西にも刺激を与えたようで，野田公夫さんたちが一時やろうとしていたようです．結局，関西の共同研究はまとまらなかったようですが，岐阜を含めてその後の共同研究が全くなかったわけではないのです．

安田　質問として『昭和恐慌下の農村社会運動』についていうと，さっきも出たけれども，なぜこんな短期間で書きあげることができたのか，まとめることができたのか，の理由を聞いておきたいのです．いま読んでも，共同研究と

しての密度は相当高い．ばらばらの論文集という感じは全くしないのです．一つのつながりを持った本になっている．これだけの密度を持っていながら，書き上げるまでの期間は短いでしょう．なぜこれができたのかという，そこはこの本に即して，ちょっと聞いておきたいことなんです．

北河　それは年齢が割合近く，勢いがあったんです．今から考えると，ぼく自身は，非常に素人っぽい文章を書いているんですが，そういう勢いでやっていけるような側面があったのですね．

加瀬　言い方を換えると，参加者みんなが自分のメインの仕事の一つに，その共同研究を置く条件があったということでしょう．今の共同研究ではそれがほとんど不可能だと思うんです．みんなが自分のメイン・テーマを抱えていて，小さなサイド・ワークとしてしか共同研究がやれなくなった．当時はそうではなくて，これをまとめる段階では全員にとってこのテーマがメインになれたのです．

北河　それとぼく自身の実感で言うと，こういう共同研究に参加したのはもちろん初めてなんですが，要するに楽しかったんです．ともかく楽しい．中身よりも，共同研究をやったこと自体のほうが印象が強くて，中身はかなり忘れてしまっているわけですが，そういう面も大きかったように思います．共同研究の影響ということについて言いますと，その後同じような共同研究はやっていないのですが，ほかの人とやっていく場合の研究の組み方みたいなものは，かなり意識するようになったということがあります．

それから個人的なことですが，農業や農村史を絶えず意識します．その後，ぼく自身はこの種の勉強からほとんど離れてしまっているのですが，同時期の農業，農村の研究について，だれはどういうことを言っているかと絶えず気になるんです．当たり前と言えば当たり前なんですが，自分の研究の文脈のなかに翻訳をするというか，そういうことを絶えず気にしています．

翻って言うと，共同研究はその本人が，当時のぼくがそうだと思うんですが，よくわかっていなくても意味があるというか，あまりわかっていない人がいても，そのことに対しては寛容であったほうがいいと，つくづくそう思いました．

大門　楽しかったというのは，ぼくもゼミに出させてもらったので，雰囲気としてはとてもよくわかるのですが，とどのつまり，なぜ楽しかったのですか．

北河　なぜ楽しかったんだろう．

大門　大学紛争の後とか，そういうこともありますよね．

北河　ありますね．どういったらいいのか，ぼく自身の実感で言うと，研究業績というようなことはまるっきり念頭になかったですね．そういう発想は全くなく，それは暉峻先生のところに出たときももちろんそうですが，そういう時期が長くて，そういうことと関係しているような気がします．

西田　さっき「この短期間に」と言ったけれども，それは割と簡単なことで，西田ゼミとしてやっていたんです．ですから，毎週水曜日は朝からずっと，場合によっては夜中までも研究会というかたちで，全員が水曜日はこの研究に当てるということでやっていたから，短期間でできたと思うんです．

ただ，その過程で北河君や赤沢君もそうだと思うのだけれども，経済史分析と突き合わせるというので，1000枚ぐらいになる個表をみんなで作りましたよね．それに基づいて，A層だ，B層だ，C層だ，D層というかたちでやって，それを北河君の第5章の小括のなかでもすごく意識して書いている．そういう論文，たぶん赤沢君もあんなに表を作ったのは初めてだろうし，階層性を問題にしながら，その地域の人々の政治思想を論じるということが割とうまくいったのではないかという気がします．

加瀬　中農層に問題の焦点を絞ったというところについてはどうですか．西田さんは1968年に農民運動関係のデビュー論文を一挙に3本出して強烈な問題提起をしたわけですが，その論文に明瞭であったのは，端的に統一戦線論的

な運動把握であって，商品生産小作農と飯米小作農という二階層があって，主導的に戦う条件を持っているのは中農たる商品生産小作農であるが，運動が発展する時には，飯米小作農もそれに連合して運動に加わる，運動が難しくなってくると，貧農の方は生活のために脱落してしまうという理解です．だから，運動の展開そのものについては，中農部分がどう動くかという条件の解明が鍵だという理解があったと思います．森武麿さんの経済更生運動論も中堅人物論という形でそれと重なる理解を出していました．また客観的に言っても，長野県の運動は貧農的な運動とはとても言えないし，青年団運動があり，農村知識人の運動が非常に目立つわけです．だから，その根拠を検討するというときには，そこがスムーズに結び付いていったのではないかと思うんです．

ですから，岩本さんが言ったように，確かにテーマの分担の面では，西田さんはある意味でいいところをみんな院生にやらせているという傾向が，これ以降も含めてあると思いますが，筋のところではそういう格好で，大きく言えば西田流のなかでやっている．

西田　当時の研究の状況からすると，労農同盟論というか，貧農革命論というか，そういう潮流がかなり強かったわけです．ぼくらの本に対する書評で暉峻さんと特に林君だと思うけれども，中農層に焦点を合わせたこの研究は将来展望がなくて，誠に暗い研究であるという批判があるんです．林君に言わせれば無限定的に中農層というような小経営的生産様式に焦点を合わせても，展望が出てこないのは当たり前だというわけです．ぼくのほうからすれば，逆にそういう批判が出ることを意識して，貧農革命論だけでは当時の農業問題は解けないんですよという意識はあったと思うんです．

清水　先ほど加瀬さんが言ってしまったことですが，この本だけではないんですが，西田さんのリーダーシップは結局はかなりのものだったと思うんです．とことんみんなに議論させて，好きなことを言わせる．しかし，大きな流れはちゃんとつかんでいて，この本の場合も，中農層でまとめるとか，地帯区分論を最初に置かなければいけないというのは，西田さんが強く出されたことです．結果的にはそれでこの本はまとまりができて訴えるものがあったと思うんです．

まずそんなふうに評価したいんですが，おそらく共同研究を一緒にやったメンバーのなかには，いろいろな意味で違和感もあったのではないか．ぼくは中農論についてはあまりないのですが，地帯区分論についてはかなり違和感があった．加瀬君もかなり反対したのですが，ぼくもあとで地帯区分論については批判的な論文を書いたりしているんです．（笑）そういうのはあったのかなと思います．西田さんが書いたのは確かに最初と終わりだけれども，単なる端書きと後書きではなくて，また単なる運転手ではなくて，ちゃんと中身をまとめあげているという点では存在感があった．（笑）こういう感じは，後の共同研究も同じではないかという気がしています．

加瀬　確かに地帯区分論は調査との必然的関連なしに，最後のまとめの段階で出てきました．この研究はこういう理解でうまく位置付けられるのかなという疑問をぼくは持った覚えがあります．

西田　批評のなかにも地帯区分論が浮いているという批判もありました．

加瀬　そのほかに何か大きな意見の違いみたいなものはありましたか．

西田　面白かったのは時期区分だった．昭和恐慌期の農村社会運動でしょう？　1927年を画期として取るのか，1930年を画期として取るのかというので，加瀬君は1930年説だったと思います．（笑）それでさんざっぱら議論して，なかなか決まらないので，最後はじゃあ，決を採ろうということで採決して1927年説になったんです．

加瀬　1930年のときの問題がもう1927年には出尽くしているから，地域の動きではこれでほぼ決まっているんだということでしたね．

西田　27年を画期にダーッと不況に入っていくんだという．

加瀬　この共同研究がその後のものと違うところがあったとすれば，現に運動の中心のメンバーの1人であった黒坂さんが調査の受け入れもやってくれて，直接その運動の雰囲気を吸収することができた．それが後の時代になると，関係者達が亡くなってしまって時代の雰囲気がつかみにくくなったという変化があったと思うんです．

あと西田さんのほうから見て，どうですか．それまで中村さんたちとおやりになった『日本地主制の構成と段階』と違って，これからものになるかどうかわからない連中を引っ張っていかなければいけないということは，責任感からいって全然違うと思うんです．そこで意識的に研究のスタイルを変えたというようなものは何かあるんですか．あるいは，前の共同研究の教訓をここに適用してみようと意識してやったのでしょうか．そうでなくて，ごく自然体でああいう研究スタイルを作っていかれたのか．

西田　割に自然にそうなってしまった．『構成と段階』で一番印象に残っているのは調査は共同でやったときにものすごい力を発揮するし，効率がいいし，問題点もはっきりする．それはすごく実感としてあったから，その点は共同研究をやって，資料を見ながら議論をしていれば，必ず論点がはっきりしてくるという感覚はあったと思います．

加瀬　たとえば永原さんが『構成と段階』のなかで果たしていた役割を，今度は自分が果たさなければいけないというようなことで，ぐっと引いたというところはないですか．

西田　そんなことはない．ぼくは引いてないよ，全然．（笑）

加瀬　それでは次に2番目の『近代日本における地主経営の展開』に進みましょう．まず西田さんから．

2．『近代日本における地主経営の展開』

（御茶の水書房，1985年2月）（執筆者：西田美昭・大石嘉一郎・神立春樹・清水洋二・伊藤正直・森元辰昭・高村直助・坂本忠次・石井寛治・鈴木正幸・小野征一郎・加瀬和俊・中村政則・田中慎一）

西田　この研究は大石先生がキャップの共同研究です．執筆者をみてもらうとわかるのですが，だいたいぼくより上の人が半分，それから下の人が半分で，ちょうどぼくが真ん中にいるんです．それで事務局長をやったという意味では非常に印象に残っている．大石嘉一郎編著ですけれども，ぼくとしては自覚的に共同研究を組織したという意識を持っていた研究でした．

服部和一郎家（西服部）という岡山県の大地主の分析なんですが，これも資料がすごくよくて，目録づくりから始めて，資料を全面的に分析するというスタイルを採りました．これも共同研究でなければできなかっただろうと思います．この共同研究は，一般的には比較的研究が手薄であった西日本地域の大地主経営の分析を，服部家の資料を使って詳細に行い，レントナー地主という類型を析出したという意味があったと思います．

それから，特にぼくにとって面白かったのは，岡山県は農民運動の先進地帯です．邑久上道連合会というのは強力な日農の下部組織なんですが，そこの地域にこの西服部家はあって，実は明治30年代から激しい小作争議に見舞われているんです．その実態を明らかにすることができたということと，西服部家としてはそういう小作争議対策をしていたのでは割が合わないからと，朝鮮土地経営に進出するとか，有価証券投資へ急速に傾斜していく．全体としては，途中でいろいろ制度改革というか，経営再編をやりながらですけれども，基本的には早期からの激しい小作争議が西服部家については重要だったのではないか．そういう激しい小作争議がずっとあって，初めて邑久上道連合会という強力な農民組織ができたんだなという実感を持ったというのが2番目です．

もう一つはみんなで議論して，特に清水君なんかとそうとう議論して，大地主経営の類型というか，地域的・段階的性格変化を問題にする場合には，三つぐらい視点が必要だ．資本主義

的経済発展とのかかわりの濃淡，2番目には小作争議に見られるような農民運動の地主にとってのインパクトの強弱，それから各地主の経営方針，この経営方針を入れたところがかなり新鮮だったかなと思います．そういう三つぐらいの基準で見ていく必要があるということで，単に経営分析をそれ自体としてやるのではなくて，経営分析をしていくうえでの視点を明確にすることができたと思います．

それで全体としては結果的には，この西服部家を見ていても，1915年に経営再編をやるわけですが，大地主経営の第1次大戦前後における大きな変化は明確なわけで，そのことを前提として，当時の日本資本主義論も論じられるべきだった．というのは，日本資本主義論争を考えたときに，実は日本資本主義論争は第1次大戦を経過した後なんです．そのときに大きな変化があったことを前提に，変化を踏まえたうえで論争が起きているかというと，必ずしもそうではなくて，明治維新論のほうにいってしまったり，あるいは農村は反封建的なのか，前資本主義的なのかということで，地代の性格のところにいってしまったりということで，意外と第1次世界大戦前後の大きな変化がとらえられていなかったのではないか．それを明らかにできたというのは，この本の大きなメリットだったのではないかと思います．あとは加瀬君や伊藤君・清水君がいますので発言して下さい．

伊藤　ぼくが社研に来たのが76年なんですが，さっきの鈴木さんや加瀬さんが西田さんのところに押しかけていって共同研究やったというのは大学院生時代だったようですが，ぼくは参加していなくて，助手になるまでは西田さんを直接には知らなかったんです．しかもテーマは金融をずっとやっていましたから，農業はある意味では完全な門外漢だったんです．それで長野の地方銀行とか秋田の地方銀行をこれまで見てきたので，西のほうの銀行も見られるかなと思って，この研究会に参加したんです．でも西服部家は，銀行を自分のところで持っていなくて，最終的には清水さんと2人で経営分析のところを分担するという仕組みになりました．

この共同研究は研究会の組織メンバーのスタイルでも，それから後，問題の関心の立て方でも，西田さんの一連のものとちょっと違うところがあると思うんです．というのは，いま西田さんが言ったように，戦前の日本資本主義，あるいは戦前の日本という国家，それを改めてどういうふうにとらえ直すのかということとの関連で，大地主経営を見ようというものだったと思います．これは一つは当時，日本地主制の体制的な確立を巡って，安良城・中村論争というのがあったり，あるいは地租や地代，農民的な蓄積，地主的な蓄積が資本主義の確立にどういうふうに意味を持っているのかという議論が当時再燃していて，そのことを西日本で検討してみようという問題関心だった．

やってみると，さっきの議論ではないですけれども，東北型・近畿型，植民地型・北海道型という概念が全部検討できる，そういう概念が入るような対象だった．つまり日韓併合直後に調査に行って，朝鮮で1000町歩ぐらい土地を持つ，また国内でも戸数割の負担が不当だというので町から出ていってしまったり，土地よりは株を持っていたほうがいいと有価証券投資をやったりする．そういう意味では西田さんが総括したように大地主経営というか，地主的土地所有が，戦前の日本の経済，日本の社会システムや統治システムのなかで持っていた意味について，それまでの研究と比べるとはるかに実証密度も高い成果をあげることができた．少し理論的に前進したのではないかと思います．

ただ，そういう議論が，その後の今日までの統治体制論とか開発経済論とか，いろいろな他の研究領域につながったか，あるいは今の農業史研究や農民運動史研究とリンクしえているかというと，そういう議論そのものがいまなくなってきているので，どうかなという感じはするんです．

それから，共同研究というスタイルで言うと，これは岡山の研究者と東京の研究者で，東京の研究者のなかでも，たとえば大江さんと一緒に仕事をやっていた鈴木正幸さんなども入ってくるという，かなり広い範囲の研究者を集めてや

った．そのため事務局長としての苦労は西田さんは非常に多かったと思います．

清水　西田先生と伊藤さんのほうから重要な点は出されましたので，あまり付け加えることもないのですが，私のこの共同研究とのかかわりは，この共同研究はたしか76年から始まっているんですが，社研の助手になった78年に，一緒についてこいということで連れていってもらったことで始まりました．その前にすでに秋田をやったり，長野をやったりしていましたから，先ほどの伊藤さんと同じようなことになりますが，西日本にとにかく行ってみたいという気持が強くあって，喜んでついていったということだったと思います．

この共同研究は，本をもちろんまとめたわけですが，それだけではなく，最初に二つの大地主の資料目録を作っている．これはたいへんな作業だったと思うんですが，私はその最後のところでちょっとお手伝いしたぐらいで，これにはほとんど関わっていません．そういうことで，私はそれほど中心的なメンバーではありませんでした．

この共同研究は，先ほど伊藤さんが言われたことですが，院生と一緒にやったほかの共同研究とは違って，従来型の共同研究といえますが，従来型のなかでは東京の研究者と岡山の研究者の共同研究というところに特徴があり，意義があったと言えるかと思います．したがって東京と岡山の間の日程を調整して調査や研究会をやらなければならないし，また東京の研究者とは言っても北海道や神戸や京都の人もいるということでしたので，そこを調整してまとめていくのに，ほかの共同研究にない苦労があったと思います．あまり持ち上げるのもどうかとは思いますが，これも西田さんがいたからまとまったという面がかなりあったのではないかと，周りで見ていて思いました．

それから，共同研究から少し離れて，この本の意義みたいなことですが，2点あるかと思います．これも先ほど伊藤さんが言われたことなんですが，それまで西日本の大地主経営の研究が全くなかったわけではないのですが，非常に手薄であったと言えます．そこのところを，かなり膨大な資料を使って緻密にまとめあげた．その後もあまり研究は進んでいないのですが，この本は西日本の大地主経営の一つの標準というか典型というものになっているのではないか．そういう意義がまずあるかと思います．

ついでに言えば，西服部家については緻密な研究ができたと思うんですが，まだ分析されていない資料がかなり残っています．とくに東服部家はほとんど手がつけられていません．私も関心はあったのですが，結局は何もやらないで終わっています．資料があるのがわかっていながら，研究が進まないというのは残念な気がします．

もう一つは，西田さんが終章でまとめた，先ほどのレントナー地主にかかわる大地主の類型化のところです．西服部家の実証分析を踏まえて，大地主経営の三類型を提起したところにこの本のもう一つの意義があるのではないかと，私は思っています．

ただ，その後の地主制史研究が沈滞してしまったこともあって，これを踏まえた研究の発展は，残念ながら，あまり見られません．そこでこの機会にこの大地主の類型化についての私の感想を3点だけ挙げさせていただきます．

一つは，類型化というのですが，類型なのか段階なのかが明確でないという感じがします．これは地域内の違いと地域間の違いを明確に区別していないからだと思います．類型化の基準の一つとして経営方針のあり方というのを意識的に出していますが，経営方針のあり方は地域内の違い（類型）を説明するのには意味があると思いますが，地域間の差異（段階）を見ていくにはどうかと思います．地域間では資本主義的な発展との関わりや農民運動のあり方による差異をより重視しなければいけないのではないかと思います．そうすると，類型というより段階になると思うんですが，その類型か段階かが鮮明でないという感じがします．

それから第二に，類型化の画期も，西田先生は第1次大戦期を重視するのですが，実際にはもう少し前の時期のほうが重要なのではないか

と思います．争議は1900年ごろから起こるわけですから，産業資本の確立過程において同時にこういう類型化が始まったと，ちょっと極端かも知れませんが，そういうふうに言えないこともないのではないかと思っています．

第三点目はレントナー地主という用語ですが，これは伊藤さんが出したんですか？

伊藤　そうです．

清水　それでは，伊藤さんに対する批判になるかもしれませんが，ぼくは違和感がある．レントナー地主というタイプを提起したことはもちろん意味があると思うんですが，レントナーという言葉は，もともとは地代や金利や配当で暮らす不労所得生活者を意味しています．そうすると，地代に寄生する寄生地主も英訳するとレントナーになってしまいますので，ちょっと違和感があります．

伊藤　その批判はすでにそういう概念を出したときから，石井さんも地主の地主化では語義矛盾だといっておられました．地主のレントナー化といったのは，ブーヴィエ等のランティエ的な帝国主義というフランス帝国主義の概念が当時出されており，そういう点を強調する意味でレントナー地主というのが有効なのではないかということがあります．

つまり東北だと土田家を見ても，ほかの地主を見てもそうですが，45年までは基本的には土地に依拠しているのに対して，ポートフォリオをかなり早くから意識している．そういうことを積極的に打ち出したほうがいいのではないか．それで西田さんも大石さんも，「これは行くべきだ．断固これで行く」と言って，ぼくはちょっと動揺したのですけれども，（笑）「動揺するのはよくない」と言われて，それが出たということだと思うんです．

ただ，段階か類型かという点で言うと，たとえば岩本さんは塩田家の分析のときに，東北の地主であっても土地所有以外にも銀行預金だとか有価証券投資を行い，いわゆる利回り計算，割引現在価値をある程度自覚して行っている，投資行動，広い意味での経済行動を取っているというのを分析された．清水さんが言われるように，タイプ，類型としてがっちり出せるのか，それとも全体として段階的な変化の問題としてとらえたほうがいいのか，というのは難しい問題だと思います．

もっとさかのぼって言ってしまうと，戦前の日本の資本主義を統治している主体はいったい何だったのか．第1次大戦後，あるいは30年代ぐらいになると，そういう地主の社会的，政治的な地位がずっと凋落していくのかどうかという問題とつながってくる．その意味では西田さんがやっている農民運動史なり，そういうものが持っている歴史的なステージの分析と本当はリンクできたし，ある程度，この本はリンクしているとは思うんです．そこをもっと前面に押し出すと，もうちょっとレントナー地主という概念も積極性を増して，その後，使う人が出たかもしれない（笑）というのがぼくの印象です．

加瀬　どうなんですか．その後，地主制史研究のなかでは市民権を持たない概念ですか．

岩本　あまり使われていないようですね．ちょっと別の問題になりますが，いいですか？この本での西田先生のコントリビューションはどういう点になるのでしょうか．さっきも話が出ましたけれども，この本は最初の共同研究とは全然タイプが違いますよね．最初の本は基本的には裏方に徹したように見えて，大きな筋は西田先生が作られた．この点は私もそうだと思いますが，2番目の共同研究のなかで西田先生が果たした役割をどう考えたらいいのでしょうか．これだけのメンバーを見ていると，事務局長格の西田さんがいなければできなかったということはわかるけれども．

西田　これは話すと複雑なのだけれども，総括はぼくが書いているんです．ですから，全体を見回していたことはそうなんです．それで全体を見回しているときに，とにかくそれぞれ個性のある研究者が集まっているわけですから，対応がたいへんなんです．「こういう資料があるから，この資料を使ってください」と言って，素直に使ってくださる先生と，（笑）全然いくら言っても使ってくれないで抽象論でやってい

る先生，いろいろありました．そういう意味ではコントリビューションというか，自覚的にぼくが大石さんと一緒になって組織している研究だというのはありました．

総括も西服部家全体をまとめた部分と，岡山県，それから全国の大地主のなかで西服部家はどういう位置を占めるのかという二つの部分に分かれていて，前半の部分を書いてみて精粗まちまちなところが目立つわけです．それでそれぞれに個性ある研究者と付き合うのはかなりしんどかったです．特に年上の方に注文をつけるのはたいへんな場合があった．でも，最後はぼくが言い切れないところは大石先生が言ってくれたので，なんとか収まったということだったと思います．

加瀬　共同研究としては，これは最初のものと全く違っていて，とにかく研究グループが先にあって皆で資料を発掘するということではなくて，資料があることはわかっていて，それを見るために後からチームが組まれたのです．ですから，相互にある種の遠慮というか，資料をめぐる約束事や何かを確認しながら進まなければいけないようなところがあったのではないかと思われます．

もう一つは，最初の研究では西田さんが一番年長で，あとは先行きどうなるか分からない院生でしたが，今度は基本的にはできあがった研究者達が資料にアプローチするために共同研究を組んでいるということですから，資料の使い方としては，放っておけば自分の独自の論点に即して資料を使うという傾向が出てくることになるわけです．そうすると，全体の研究のなかで十分位置付いていないかたちで原稿が出てくる．

ぼくなんかが普通に考えると，様々な立場・年齢の人が集まった研究会はそれでしょうがない，そういう本しかできないだろうと思うのだけれども，資料が語るべきことを整合的に語らしめなければいけないと考えている西田さんとしては，総括を書く立場からしても，それでは筋が通らないということで，それぞれにかなり厳しい注文をしていくわけです．そこのところが非常に感心した点で，共同研究を成り立たせるために，ある意味では悪人にならなければいけない部分があるんだなと感じました．

それは本人が書いた総括に反映されるというものでは必ずしもないのだけれども，そのために全部の資料を読み直して，それぞれの人の書いた部分，資料の使い方にまで立ち入って，いろいろコメントしているというのはたいへんな作業だったと思います．

伊藤　いま加瀬君が言ったこととの関連で西田さんの立派なところを一つ付け加えると，資料が先にあったと言われたけれども，結局，こういう農村調査などをやるときに，中央の研究者がワーッと行って，資料を中央に簒奪してきてしまうという批判がある．今度は絶対にこういうことはしない．逆に地方の人がプライオリティを主張するようなこともこの場合はちょっとあったのですが，とにかく対等，平等のかたちで資料にアクセスできるようにするために，まず目録づくり，とにかくきちっとした目録を作って，それでだれでもが使えるようなかたちに最初にしましょう，ということを早くから強く主張していたのは西田さんなんです．

財政的にできる，たまたま社研で出せるということもあったのけれども．それから岡山の学生さんがたくさん目録づくりに協力してくれた．ただ働きの奉仕労働者が多くて，それで西田さんは奉仕労働が好きになって，後々までいろいろ問題を起こしているのではないかと思うんですけれども，（笑）そういうことがあって，あの目録ができたというのは特筆すべきことだと思うんです．

しかし残念ながら，その後有効に使われているかはやや疑問です．いくつか論文が出ていますし，岡山の教育学部の論集とかいろいろな形で出ているから，ある程度使われているのは間違いないのですけれども．

加瀬　東服部の方は，あれだけ膨大に資料があって，しかも利用してくれと持ち主が言っているにもかかわらず，その後，何も共同研究が組織されていないし，個人としても使っている人はいないですね．

伊藤　東服部はないですね.

加瀬　ああいうのは体制をうまく組まないと全く進まない.

西田　東服部の資料は使うのが難しいよ.

加瀬　論点がすぐには出てこないということも予想されるし，分量が大変だ.

西田　簿冊1個，マグロとぼくらは言っていたけれども，こんな大きくて，材木なんだよ.（笑）

加瀬　港ですから，近世からの材木問屋で.

西田　あれを見ただけで，ちょっとこれ，手をつけるのはという.（笑）

岩本　経済史研究の現状から言うと，そういう資料がむしろ面白い.

西田　流通史.

加瀬　ああいうのにアプローチしたときに，うまい具合に資料の利用のための体制が組めるかということを課題として残してしまった共同研究だったと思います．それでは3番目の『近代日本の行政村』のほうに移りたいと思います.

3.『近代日本の行政村』（日本経済評論社，1991年2月）（執筆者：西田美昭・大石嘉一郎・筒井正夫・大門正克・田崎宣義・土方苑子・大島栄子・金澤史男・安田浩・栗原るみ・林宥一）

西田　この共同研究は，最初の『昭和恐慌下の農村社会運動』と『近代日本における地主経営の展開』の人的構成からいくと，中間というか，大学院生も一部，当初はいましたけれども，大学院生は少数派で，できあがった研究者，しかし，ぼくと大石さんよりはみんな年下であるという構成メンバーでした.

これも資料を探したというものではなくて，五加村に資料が大量に残されていることは，すでに大江さんたちの仕事が公刊されていたのでわかっていたわけです．しかし，大江さんたちの研究では，この資料が部分的にしか利用されていないこともあって，大江さんたちのグループに所属していた林宥一君と安田浩君の両氏も含めて，改めて全面的に分析しようということになった．これは林君と安田君がそういう気になってくれなかったら，たぶん成り立たなかった共同研究だったのではないかと思いました.

それから，この資料は有名ですけれども，とにかく膨大な文書で，かつ，かなり完ぺきなものでした．それだけに資料目録を公刊することはできなかったけれども，資料目録づくりに相当な時間がかかって，1年半かそのぐらいかかったかもしれません．手書きでこんな分厚いものになりましたけれども，その資料を整理して目録を作るところから始めたわけです.

結局，五加村の12年と言って12年かかったのですが，現地調査が20回，研究会が65回，「五加村研究会通信」が50号というかたちでかなりのエネルギーを割いてやった分析です．当初は五加村の役場資料を中心にして分析した農村史という程度の位置付けで始まった．とにかく五加村の資料を全面的に分析しようという.

ただ，分析の視点が明確であったかどうかというのは，最初はそういう視点はあまり明確ではなかったんです．ところがだんだん最終段階になって，できあがったところで考えると，1889年の町村制の成立から，1955年戸倉町に五加村が合併するわけですが，そこに至る66年間の五加村という行政村の段階的変化を地域的公共関係のあり方に注目しつつ，全面的に分析した作品，つまり地域的公共関係というキーワードを見つけ出すことができたということだと思います.

この村は五加村という名前が示すように上徳間，内川，千本柳，小舟山，中という五つの自然村が合併して成立した村でした．本書ではこの五つの自然村自体が持っていた公共関係と，五加村という行政村それ自体の持つ地域的公共関係の両者の関連のしかたの変化に注目しているところに大きな特徴があると思っています.

また，各区同士の対立が行政村のあり方に及ぼした影響も大きいものがあり，各区ごとの対立は大きいのですが，この本ではそれだけではなくて，とりわけ1920年代以降の小作争議などを中心とする階級対立が，行政村という地域

的公共関係の質的変化に与えた不可逆的な影響についても，明らかにすることができたのではないか．

この本も資料が膨大であるということで，当然，共同研究なしにはまとめることはできなかったのですが，とりわけ所得調査簿の整理・分析に相当な力を何年もかけて，挫折しそうになったこともあるのですが，やって，最終的にそれが大きな財産となり，分析の基礎になったんですが，たいへんな作業でした．

きょうは特に言っておきたいのですが，1999年8月の初めに亡くなった林宥一君の果たした役割はこの共同研究では大きかったと思います．この共同研究にとっても，また林君の研究にとっても，五加村の研究は重要なものであった．総括の草案は林君が書きました．それでみんなで読み合って手を入れていったわけですが，原型は明らかに林君のものですし，地域的公共関係を重視するという視点も林君の提案でした．その視点は林君の1993年に書いた「階級の成立と地域社会－労働・農民運動組織化とその影響－」という論文に生かされることになりました．この論文は2000年の6月に発行された林宥一著『「無産階級」の時代－近代日本の社会運動－』に収められています．そういう意味では林君が亡くなったのは誠に残念というか，痛恨の極みですけれども，林君がこの五加村の12年で果たした役割を，きょうはとりわけ明確にさせていただきたいと思っています．

大門　いま西田さんが言われたように，12年かかりました．きょう，ここでとりあげる共同研究の中では五加村が一番長くて，うれしいんだか，（笑）何なんだかよくわかりませんけれども，とにかく長くかかったというのは西田さんが言われたとおりです．長くかかって，いろいろたいへんなことも多かったのですが，共同研究としての緊密さという点では，ほかに負けないというのも変ですけれども，相当緊密に共同研究をやったという思いがあります．

先ほども西田さんが言われたように所得調査簿を全面的に利用するということで，当時ですと，一橋の大型コンピュータに入力をする．それを決めるのに大激論があったのですが，それを全員で作業を分担する．それだけではなくて，役場資料を当初，執筆分担を決めずにアットランダムに分担をして，それを報告していくというのを2年ぐらいやりました．

ですから，今までだったら見ないような分野ですよね．寺社とか社会事業とか，脇に置いてしまうような分野の資料もとにかく読んで報告をして，どういう資料があるのかということについては，一通り，全員で把握する．そういうことをやったうえで所得調査簿も利用して，経済過程と行財政と政治過程で時期区分をしながら分担をしたということだったのです．

この五加村での研究での西田さんの位置は，当初はやや引いていたという印象がありました．西塩田とは違う年齢構成だし，大石嘉一郎さんがいて，それから林宥一さんと安田浩さんたちの世代にバトンタッチするということで，全体の進行についてイニシアチブを取るという役割は，途中までしなかった感じがあります．

西田さんでよく覚えているのは，みんなで調査に行ったときには分担した資料を役場の休憩室の畳の部屋で見ているのですが，とにかく疲れるわけです．あのころ，西田さんはよく疲れて，休憩のたびによく寝ていた．さぼっていたわけではないんですけれども，（笑）それが非常に印象的だったんです．

しかし，最終盤になって，戦後改革期をどうやってまとめるかということで大議論がありました．そのときに見解の相違ということになりかかったのですが，そうではなくて，利用していない，活用していない役場資料がこういうかたちである．こういう資料を活用すれば，もう少し別のことが実証的に言えるはずだということで，西田さんが率先して2度補充調査に行きました．まだ撮影をしていなかった資料を撮影し，その当時の担当者に渡し，それを分析するようにということを，西田さんがやったのをよく覚えています．

なんと無私の人なんだろうと思いました．ぼくも補充調査に1回はついていったのですが，

結局，そこで撮ってきた資料が非常に重要だったわけです．最終的に西田さんは経済過程しか執筆していませんが，経済過程と政治過程については西田さんがその資料をもとにして分析をし，戦後改革期全体のイメージを西田さんが出しました．資料に基づいて意見を出すという，最終盤での共同研究者としての西田さんのイニシアチブの取り方は本当に本領発揮というか，面目躍如というか，とにかく徹底して資料に当たりきって，そこからものを言うという姿勢は五加村でも崩れていないという感じがしました．また，これはおそらく次の『戦後改革期の農業問題』につながると思うんですが，西田さんはすでにここで食糧問題に注目していました．

そういう点で言うと，確かに林さんや安田さんたちの役割は大きかったし，全体を総括していくうえでの林さんの最終章の役割は大きかったのです．しかし，この五加村のなかに西田さんの痕跡が薄いのかというと，決してそうではなくて，目に見える部分と見えない部分の両方にあって，なおかつ，これは西塩田でも言われたような，どこかで必ず自己主張をしている，そういう気がしました．

安田　だいたい大門君が言ってくれたのだけれども，本当は私ではなくて，『近代日本の行政村』については，亡くなっていなければ林君がしゃべってくれれば一番よかったと思うんです．この研究では資料の膨大さがまず印象に残っています．個人ではとてもできなかった．共同研究でないと，絶対できない全体量です．もともと私なんかはやるつもりはなくて，大江志乃夫編『日本ファシズムの形成と農村』の研究で，林君は部分的に利用したけれども，私はこんなに膨大なものを部分的に使うというのは怖くてできないと思って，結局，大江さんの本のときはやめてしまったわけです．

しかし，手掛けた資料をほったらかしでいいのか．せめて資料整理まではやらなければだめだとかなんとか林君に言われて，しょうがなくて研究会に入った．（笑）西田さんや大石さんは「小学校の体育館に広げたときにその膨大さと完ぺきさに感動した」というのだけれども，ぼくの記憶，ぼくの感じでは，広げたときにもう嫌になって，（笑）目録を作ったら，もう研究会から抜けようと思っていたというのが正直なところです．

もう一つ，資料の共有化は非常に重要だというのはこの研究会で学びました．さっきも大門君が言っていたように，自分の論点には必ずしもならないけれども，とにかく資料に即して分野ごとに内容を紹介する．これを延々とやった．だから，活字になったときには，最初に紹介したのとは違う人が利用して書いているというかたちに相当なっているんです．それがあるから，一応，ある程度の整合性がついている．それぞれその分野でやっていたのだと，整合性はうまくいかなかったと思うのです．これは非常に大きい点で，逆に言うと，つまり共同研究は時間がかかって，手間がかかってというのが本来の性格だと思います．ただし，一つの村にしか過ぎないけれども，総体を理解するという話だと，こういうかたちの共同研究のスタイルでないと絶対できない．そういう印象がぼくには残っています．ただ，またやるかと言われると考え込んでしまうけれども．（笑）

それから，西田さんは80年代前半が一番体の調子が悪かったのではないですかね．

西田　しょっちゅう悪いところがあるのだけれども，五加村を始めたころは特によくなかった．

安田　本当に元気がないという感じでした．ただ，本当に西田さんは資料に則してものを言う．資料に即してものを言わねばならないという点の徹底性は非常に感じました．自分と評価が違っていても，資料に則してこの次元では言えるということなら許す．資料にないことを言うと怒る．（笑）歴史研究のあり様というものも，ぼくはそういう点で非常に学べたという感じがしています．

最後に取りまとめる段階で，相当，考え方，意見の違いと言いますか，自分の見解として言うことになれば，それぞれ，かなり個性のある人間が集まっていたにもかかわらず，なんとかかんとかまとめられたというのは，資料に即し

て言うとどうなるのか，五加村の場合だとどうなるのかというのに徹底してこだわった，そこに共通基盤を作ろうというのがあったということが，まとまるということになったと思うんです．

特にさっき話の出た戦後の改革の部分は，西田さんがあそこでがんばって，あれだけわざわざ補充調査まで行ってやらなければだめだということを形で示すというので，これはしょうがない，どうしても原稿を書かなければいけないという気にみんながなった，という要素は非常に大きかったと思います．その意味では本当にまとめるというところではその役割は大きくて，西田さんがいなかったら，まだ，もう5年ぐらいかかっていたかもしれない気がする．（笑）

加瀬　これは資料の大半が村行政関係のものであって，したがって「行政村」という視角を設定せざるを得なかったのではないかとも思うんですが，そのことの意味あるいは限界についてはどんなふうに考えられるんでしょう．つまり農村の全体像とは必ずしも一致しない，行政レベルで把握された村の流れということになりませんか．

安田　ただ，区有文書が内川を中心に出てきたわけです．それを突き合わせることによって，昔から言われていた行政村と自然村の二重構造という問題を段階的な変化を含めて，きちっと追うことができた．

その意味で経済的な基礎過程が，所得簿があってきちっと分析できたということが一つのメリット，もう一つは行政村と自然村の関係で，こっちは私みたいな政治過程に興味のある人間にとっても，非常に面白かった．そういうことです．

あとは，こういう1戸1戸の農業経営の所得がずっとわかるということだと，基底体制還元論で結構，説明がつくのではないかというのが五加村をやった印象ですね．つまり，経済還元論が問題だというのは，相当大ざっぱなところの経済状況に還元するから，非常におかしな政治過程の説明になるのであって，こういう1軒1軒までわかるという話になれば，相当，経済的な分析で説明がついてしまうと思うのです．100％はもちろんいかないけれども，8割方まではまずつくのではないか．その意味では基底体制還元論でいいのではないかという印象を持ったというのが，この研究をやっての感想です．

北河　五加村の問題は十分理解していないのですが，石田雄さんが『土地制度史学』の134号で「戦後社会科学と村落史研究」という書評論文で批評されていて，ぼくはあの批評は当たっているような気がしています．両者はやはりかみ合っていないという印象を持っています．それは五加村の研究の問題だけではなくて，戦後の農業・農村史研究，それから運動史研究の流れ，森武麿さんなんかもそうですが，石田さんたちを批判はしているのだけれども，きちんとかみ合っていないままに来ていて，その問題はずっと残ってきてしまったという印象をぼくはずっと持っているんです．

話が戻ってしまうかもしれませんが，西塩田の場合，特に岩本さんが担当された農地改革では，組織論といってもいいと思いますが，かなりそういう面を意識されています．つまり，運動史だと状況によって高揚し，また状況によって衰退するという話に，悪く言えばなるわけであって，その後のいろいろな運動を考えると，50年代のサークル運動とか，その後，市民運動と言われる諸形態があって，現在に至っている．運動と言っても，そういう全部を見渡して，その問題性を考えることがどうしても必要になってくる．そういう組織論的なものに立ち入る必要がある．これは五加村の問題だけではなくて，そういう次元の問題がどこまで意識的にこの種の研究のなかで追究されてきたのかなということです．

安田　北河さんの言われていることは半分ぐらいはわかったという感じなのだけれども，運動の盛衰は基本的には経済的な条件で相当，規定されているというのが私の意見なんです．それはそれでいいじゃないかというか，しょうがないじゃないか．問題はさっき組織論と言われた，運動などが存在したことで継承されるものは何かというと，おそらく経済の次元ではない

という問題が出てきているんだろうと思うんです．そこをどこでとらえるのかということなのだけれども，林君はおそらく地域的公共関係の形成とその担い手というなかに押さえようとしたというのが提起の意味だったのではないかと，ぼくは理解しています．

伊藤　今の北河さんの感想とそれに対する安田さんのリプライなのだけれども，運動の範囲，あるいは石田さんの批判の射程の範囲は，北河さんはどこが一番大きいと考えているんですか．つまり，従来型の広い意味でのマルクス主義的な発想に基づく階級闘争論的な観点をベースに置いて，それをもうちょっと広げた，緩やかにしたところでのいろいろな労働運動とか農民運動とか，そういう問題把握についてのずれということで考えているのか，あるいは，もっと広い近代政治学で言われているようなネオコーポラティズムとか，いろいろな範囲での社会的な対抗関係の存在そのものを解析する一つの対象としての農村というような，そういうところの分析でのずれと考えているのか．北河さんの質問はある面では西田方法論批判みたいなところもちょっとあるのかもしれないと思ったんです．

加瀬　その点はぼくも良く分からないですが，対抗の方向については基底体制還元論で良い，しかし，運動の度合い，強さについては運動の盛衰を規定する経済に還元できない独自の問題があるだろう．そちらのほうは石田さんが言っているような，もっと広い対抗軸で考えていかなければいけないということかなと思う．

北河　政治文化論みたいなものが石田さんの場合にはあって，そういう観点からいけば，左翼であれ，右翼であれ，組織自体の持っている問題性が，今から翻って考えると大きいわけです．状況によって衰退したという説明だけでは，何を取り出すかということが問題になりにくいような気がしています．それと，運動と言うよりもう少し広く考えて，日常的な組織のあり様まで含めて考える必要があるのではないかと思います．

加瀬　組織と言った場合に，具体的には何を意味するのかという点を含めて，次の農地改革の運動にもかかわりますので，そこでまた議論できればと思います．時間も制限されていますので，4番目の『戦後改革期の農業問題』のほうに移りましょう．

4.『戦後改革期の農業問題』（日本経済評論社，1994年2月）（執筆者：西田美昭・大豆生田稔・川口由彦・花井俊介・戸塚喜久・大川裕嗣・松村敏）

西田　『戦後改革期の農業問題』，これも11年かかっているのですが，ぼくにとってみれば，2回目のぼくの大学院演習ゼミの参加者との共同研究として出発しました．これは西塩田のときと比較的似ていて，資料は農地改革関係文書が越谷市に残されていることを越谷市史で知っている以外はほとんど資料の当てはなかったわけです．したがって資料を探索するところからこの研究は始まった．今でもよく覚えているのですが，1日中資料を求めて，秩父のほうまで行って，結局，何もなかったという日もありましたが，最終的には様々な資料に巡り合うことができました．

それで，『昭和恐慌下の農村社会運動』のときには北河君と赤沢君という政治思想史の人が参加してくれたことが大きな意味を持ったわけですが，この研究ではきょう参加してくださっている，日本法制史を専攻している川口由彦君の参加が大きかったと思っています．川口君が参加してくれて，農地改革関係法制と食糧供出関係法制の性格の違いをはっきりすることができて，この本の組み立て，全体の構成が可能になったように思います．もちろん，ほかのメンバーの役割も大きく，花井君の食糧供出問題についての詳細な在地の資料を使った分析や，戸塚喜久君の農地改革についての一筆調査の3号，4号申告書の詳しい分析などは書評でも高く評価されました．またこの本は手元にあるものを見たら，かなり書評がたくさん出た本なんです．今まで農地改革に研究が偏っていて，ある意味では戦後改革期の農業問題の最大なものは農地

改革だという．そうではなくて，食糧問題のほうがかえって重要なんだ．あるいは，農地改革は強力な地主の抵抗を押さえて，やっと占領軍の力を借りてできたんだという理解に対して，必ずしもそうではなくて，農地改革は地主の抵抗とは言えないような耕作者同士の争いという性格のものが非常に多かった．そういうものを解決する法制度的な機構もきちっとできていて裁量の余地がなく，紛争が起っても，それをきちっと処理できる機構が備わっていたんだということを主張しました．そういうことで今までの通説的な理解に大きな修正を迫るような研究にもなっていて，たくさんの書評，反発，とくに農地改革をそんな位置付けをしていいのかというような批判がかなりありました．

でも，それだけに意味のある問題提起的な本になったのではないかと思っています．だいたいぼくが考えている研究史上の位置というのはそういうことです．川口君からいろいろ意見補足を出していただければと思います．

川口　私の名前を出していただいて光栄なんですが，私はこの研究は，おそらく大川君と花井君が事務局的というか，彼らが核になっていたのでできたという気がするんです．私はもともと法制史で本来の専門ではないと思っていたので，周りで自分の好きな踊りを踊っていたら，知らないうちに真中に放り出されていたというような，そういう印象が強い研究会でした．

ですから，回想的に言いますと，もともと先ほど西田さんがおっしゃったように，これはゼミとして始まったものです．いままで聞いていますと，最初に出てきた『昭和恐慌下の農村社会運動』と同じようなかたちで始まって，しかも資料の集め方なんかも結構似ています．クルマでいろいろなところをさまようかたちで動き回って，いろいろな記憶があります．菖蒲町の農協の崩れかかった小屋みたいなところから資料をいっぱい出して並べたこととか，かなりビジュアルな記憶がいっぱいあるんです．

それがどうしてこんなに長いこと10年もかかって，（笑）『昭和恐慌下の農村社会運動』が3，4年ぐらいで終わったのか，そこの比較論はちょっと興味があるんです．どういう違いがそこにあったのかというのがよくわからないということが一つあります．

もう一つ，これは最初ゼミとして始まったので，そこに来た人間は別に共同研究をやろうというつもりは全然なかったわけです．それで，私などは特にそうでしたけれども，専門が土地法史をやっていて，日本の土地法史を専門にしている先生は東大にだれもいなかったんです．一番近い専門をやっていらしたのが西田先生で，だから，大学院のゼミで来たというだけの関係でして，最初のころ，それぞれ自分がやっていることを報告し合ったときに，ほかの人は皆さん，経済史とか農業経済の松村さんとかいましたけれども，ずいぶん批判されたというか，考え方がどうも違うなというのをすごく感じました．西田先生からもずいぶんいろいろ言われた記憶が私はあるんですが，結局，所有の問題と所有権の問題はちょっと次元の違う問題なんだ，そういうところからずれが生じていると思ったんです．もっともこれは，後から整理したら，たぶんそういうことなんだろうということなんですが．

それでありながら，なぜ最後のところになってきて，この西田先生のレジュメに書いてあるように，私の農地改革関係法制・食糧供出関係法制の分析を使って全体を組み立てることが可能になったのかというと，テーマがもともとそういう性質をもっていたのではないかという気がします．戦前の場合には要するに地主的土地所有と言っても，私的土地所有に対する裁判規範である民法とか手続法である小作調停法とか，そういうものしかなかった．それが戦後改革期はそういうものを包括的に包み込んでいくような国家的な規制が，ドンといわゆる政策立法のかたちで入ってくるわけです．そうすると，いま言った所有と所有権の認識のずれの問題がそれほど顕在化しないテーマになってくる．おそらくそうなんだろうと思うんです．それがここの最後にまとめたときに，農地改革と食糧供出のシステムが違うということを私が後半ぐらいに言い出したのが，うまいこと調和して，最後

まとまったという感じがするんです．

それで私の感想としては，はっきり言ってよくまとまったなというのがあるんです．（笑）きょうはなぜか大川君が来ていないのでわからないのですが，大川君はずっと悲観的でしたよね．まとまらないだろうという（笑）雰囲気でずっと来ていて，それを西田さんがいつも，「いや，まとまるんだ」とおっしゃっていて，私は傍観者的にそれを聞いていた．ただ，自分の関心から，取っかかりやすかった埼玉の訴願書類の分析をやっていたわけです．

あのとき，先ほどお話が出たと思うんですが，西田さんの資料に対する執念みたいなものを私は非常に学習したというか，鍛えられたというのがあるんです．この訴願書類を見られるようになるまでが大変でしたから．特に日本法制史の研究は立法史の研究とか裁判史の研究みたいなものは多いですが，地域レベルの資料を使った研究は非常に少ないものですから，そういう意味でも私は勉強になったんです．

それでとにかく埼玉の訴願の書類を見て，それをとにかく分析していった．そのときに初めて自分がそれまで持っていた所有権論をそこに展開していったわけですが，これを進めていくとどうしても農地委員会の性格付けをしなくてはならなくなった．訴願を処理していく過程で農地委員会という行政委員会が問題になるわけです．ところが同じ村に食糧調整委員会という別個の行政委員会がもう１個あるわけです．この二つの関係はどうなっているのかという問題意識がそこから出てきたわけで，訴願の分析から食糧調整委員会，後の農業調整委員会になっていくものとの関係がどうなっているのかというところになっていって，それでそういうことをかなり詳しく調べて報告をしたわけです．

これは私の個人的な研究の話になるのですが，結局，この埼玉での研究の影響を受けて，たまたま私は個人的に当時，香川県の資料調査をやっていて，香川県でこれもたまたまなんですが，農地改革関係の県レベルの資料を私が発見してしまったという事件があるんです．（笑）ないと言われていたものをあるところで見つけたんです．香川のほうでは農地改革関連のものは，訴願と小作調停と農地立法，全部がまとまってドンとあったのです．そこのイメージを埼玉のほうに持ってきて，それをここで報告をした．たぶんそれで最終的に，あれだけいろいろなかたちでまとまりそうもなかったものが幸福な調和をしたんだという気がするんです．

この本はそのほかにもいろいろ思い出があるんですが，ここで出てくる湯本家文書というのも一応，県立文書館にあるわけですが，これはもともと湯本家という埼玉の割と大きな地主が行田にあって，ここの湯本聡一郎さんという人が県の農地委員をやっていた．当時，この研究をやっていたころは，先ほどの『昭和恐慌下の農村社会運動』と同じように，直面していた人たちがまだぎりぎりのところで生存していた時期なんです．ですから，いろいろなところで直接，そういう人に会って話を聞いている．

住所を調べて，たぶんここだろうというので，最初は湯本さんの家に私と大川君と戸塚さんと３人で行ったと思うんです．湯本家のイメージというのは，その後，私個人にとってはすごく大きな影響を持っているんです．そういう巨大な地主で，造りは大きそうなのだけれども，実は中に入ってみると，非常に質素な生活をしていて，そういう人が農地改革のなかでかなりがんばっているというか，活躍しているわけです．最初は地主委員として出て，その後，中立委員で出るというかたちで活躍している．この人が同時に食糧供出に委員として大きな力をさき，他方で農地改革をすすめている．農地改革と食糧供出の関係は，この湯本家の光景をもとに発想したところも多分にある．同時に湯本家の文書があったことによって，訴願関係をもっと深く研究できたことも確かです．

あとは記憶として残っているのは，最後のまとめの段階に至るまで結局，議論が完全には煮詰められなかったという感じがしているんです．最後の入稿のぎりぎりのときになって，私はよく覚えていますけれども，そこの大会議室でみんなで結論部分を，西田さんが一応，書いたものをどうするかというので議論になって，最後

に私と大川君でかなり議論をやって，西田さんが何か用事で抜けてしまったんです．それで私と大川君が議論をした末に，私がかなり書き直したものを大川君にこれでいいかと言って，お互いに譲歩し合って，それでまとめたという経緯が確かあるんです．

そういうような体験と記憶と，それから，学習というのか，そういうものがいろいろ思い出深い本だといえます．

花井　すでにいろいろとお話が出ましたので，ごく私的な話からさせていただきますと，私にとってこの本と共同研究は，強烈な思い出というか，忘れられない印象深いものです．まず最初に，共同研究に突然引っ張り込まれたところから印象的でした．私が大学院に入って1年目のときに，蚕糸業をやっていた関係で農業史の勉強をしようと思って，わりと軽い気持ちで西田さんのゼミをとったわけです．ですが，取ってみたら，いきなり「これは単なるゼミじゃない．みんなで農地改革の共同研究をやろう．」と西田さんが宣言した．最初はびっくりしましたが，何だか嬉しかった．「自分に研究なんてできるだろうか」と思っていたところですから，共同研究者の一人に加えてもらえただけで嬉しかった．本当は農地改革に特に興味があったわけじゃないんですが，でもとにかく研究らしきものができそうだということで喜んで参加したんです．ところが，実際にやってみると大変でした．『農地改革資料集成』あたりをみんなであれこれいじくるところから作業を始めたわけですが，いろいろやってみたけど，なかなか「これだ」という論点は出てこない．このとき印象的だったのが戸塚さんで，論点や問題点を見つけだすのがすごく上手かった．「すごいなあ」と思ったのを覚えています．だけど，『資料集成』だけいじくっていてもダメだということになって，埼玉が近いから埼玉をフィールドにしてやろうという話になった．このときの資料の探し方も，私にとってはとても勉強になりました．まず，埼玉県立文書館に行って県内の市町村史をみんなで網羅的に当たって，その地域について農地改革関係の記載がどれくらい詳しいかを調べる．詳しく記載があるところは資料もあるはずだということで，調査地を選んで，役場に行って，その市町村史のもとになった資料はどこにあるかを尋ねる．こんなやり方で確か南埼の越谷に目を付けて，かなりまとまった資料を見つけ出したのを覚えています．ですから，研究のやり方の一番基礎的なところから教えてもらったわけです．資料探しの点で西田さんはとても上手かった．交渉のやり方はソフトなんだけれども，結局資料を引っ張り出すというか，その辺のやり方は勉強になりました．勉強になりましたが，未だにこれはマネができません．そんなわけで私はこの共同研究で研究のイロハを教えてもらったわけで，その点で忘れられない経験になったと思っています．

それからこの本の内容についていうと，少し話が出ましたが，やはり農地改革の評価に対して大幅な修正を迫ったことと，もう一つ，それと関連しますが，食糧問題の方が農民にとっては大問題だったんだということを主張した点が重要だと思っています．ただ，この点は佐伯先生の書評で「そんなことを新しいと思うのは土地制度史学会の人たちだけだ」と言われましたが…．でも，確かにこの時期の食糧問題には着目していたかもしれないけれど，きちんと在地レベルでの実態を明らかにすることは行われていない．その点は新しいと思っています．実は食糧問題のところを私も担当させてもらったんで，あまり言うと自惚れみたいですが，食糧問題の実態と構造を明らかにしたことは，この研究の魅力の一つになっていると思っています．ところで西田さんも言われたように，最初は農地改革の研究をやるということで始まった．それが食糧問題の方が重要ということで方向転換していくわけですが，その転換をリードしたのは実は西田さん自身だと思う．というより，私はとても強烈に覚えているんです．埼玉のいろんなところを調査したんで，どこだか正確には思い出せませんが，たぶん越谷辺りだと思うんですが，食糧関係の資料がたくさん出てきてそれを見ていて，そのときに昼めしか何かで外に出て歩いているときに，西田さんが突然「やっ

ぱり食糧問題の方が重要だ．農民にとっては農地改革より食糧の方がよっぽど切実な問題だったんだ」というようなことをポツリと言った．私にはその一言がものすごく印象的だった．そういう風に考えると，いろんな資料がずっと立体的に理解できると思ったわけです．恐らくそれから，みんな一生懸命に食糧関係資料をみるようになったと思います．ですから，節目節目で，この共同研究を新しい方向に引っ張って行ったのは，あくまで西田さんだったと思う．その場合，西田さんの着眼点の特徴はというと，食糧問題でもそうですが，常に農民の目線に立つというか，農民の生活実感を大切にするということだと思います．もちろん，こういった視角が常に有効かというと，必ずしもそうではない場合，例えば渦の中に入ると流れが見えないような場合もあるかもしれないけれど，私はこの西田さんの一貫した姿勢に敬意をもっています．あと，最後の段階で入れ替わり立ち替わり脱落寸前のメンバーが出て，私もその一人でご迷惑をかけたんですが，私が何とか書き終えた後，戸塚さんが社研の，この部屋の向かいの小会議室に西田さんの命令で缶詰にされて，原稿が少し書けたら西田さんのところに持っていくという親身の指導を受けていたのを覚えています．そして最後の最後で，それまで研究会の面倒をみてきた，まとめ役の大川君が脱落宣言を出して，何とか引き留めることができたんですが，とにかく良い意味でも悪い意味でも最後までスリリングな研究会だったというのが私の印象です．

西田　すごく長くかかったということについてだけ．一つはだんだんぼくも体力が落ちてきたということで，それは争えないことなのだけれども，もう一つは落ちそうになった執筆メンバーが，たとえば花井君が「もう私は書けませんから降ろしてください」と言って，それをなんとか説得して，始めたら，ものすごい勢いで書き始める．また最終段階で大川君が「自分はだめだ」と言ってくる．大川君のは最終的には，大豆生田君と花井君が資料を引き取って，全部，農家経済調査の整理をやって，大川君に渡して，「ここまでやったから文章，書け」というかたちでやるとか，戸塚君も遅筆で有名なのだけれども，（笑）書けないわけです．報告はものすごくいい報告を何回も聞かされているのだけれども，字にならないというようなことがあった．

だから，研究会の途中で休眠しかかるということが何回かあって，最終段階で本当にまとまらないと思ったことも，ぼくも実はありました．だけど，なんとかまとまった．ただ，本として精粗まちまちというかたちになったことは否めない．たとえば食糧問題の花井君のやったところとか，川口君や戸塚君がやったところは非常に緻密になっているけれども，農家経済調査，ぼくが一番重視したかった農家経済のところはデータはあったけれども，分析が非常に弱い．これは書評でも言われています．それから，農民運動のところの分析も掘り下げが足りないではないかとか，あるいは農業会から農協へというところの分析も，佐伯尚美さんなんかから通説を一歩も出ていないとか，誤解があるとか，いろいろなことを言われました．しかし，いろいろ問題があるのだけれども，全体として見れば，この本は最終的には，問題提起的な本になったと言えるのではないか．

加瀬　この本によって，西田さんの農地改革に対する評価が非常に変わりましたよね．3年前の行政村のところではそういうのは出ていなくて……，そうでもないですか．

西田　いや，ちょこっと出ている．

加瀬　それは連続的なんですか．岩本さんと農地改革の評価を巡って論争された時のような，農地改革の高い位置付けとは変わっていますよね．

西田　五加村で，実際の資料をいじってみて，これは中村浩村長という共産党員の村長のもとで農地改革が行われるのだけれども，そんなラディカルなことをやっているわけではなくて，農地改革法の枠内できちっと公正に処理しようとしていたのが，五加村の農地改革の本質ではないかというようなことは書いてあるわけです．それがほとんど確信にまで高まって，ぼくの前の「農地改革の歴史的性格」の説を捨てること

になったのは，この『戦後改革期の農業問題』で資料をみながらみんなで議論した結果でした．

加瀬　その場合に地主制の弱体化という点で，戦時期との連続性が強くイメージされていますね．戦時期に機能を喪失した地主制が戦後になって元に戻る可能性は，全く考慮されなくなっているようなのですが．農地改革はなくても，地主制はもうなくなったといっているわけではもちろんないのですが．

西田　それはちょっと言い過ぎで，所有権を地主から耕作者に移すわけですから，いくら実態として小作料率が5％になってしまったとか，経済的に地主が小作に貸し出しても，何のメリットもないと言っても，所有権自体は地主にあるわけで，これを移転する手続きはものすごくたいへんです．そのために一筆調査というのがあるわけで，その点はこの『戦後改革期の農業問題』の総括でも書いておきましたけれども，農地改革の歴史的意義はどんなに強調しても強調しすぎることはない．

ただし，今までのような地主制がずっと強力に残っていて，暉峻さんなんかのイメージがそうだと思うのだけれども，特に在村耕作地主の力は残っていて，その改革への抵抗を押さえて，やっとＧＨＱの力を借りてやったという，そのイメージはちょっと違うのではないか．そういう感じです．

加瀬　岩本さん，何かコメントはありませんか．

伊藤　ぼくもちょっと岩本さんに聞きたいんです．西田さんが強調された『戦後改革期の農業問題』のなかでの農地改革の位置をある程度相対化するということ，それから農地改革それ自身の歴史的な位置付けについて，その両方とも先駆的に岩本さんは従来の通説批判をやっておられたと思うんです．それと，この研究との関係を，西田さんたちはどういうふうに理解していたのか．

西田　そんなに齟齬をきたしていないのではないか．

伊藤　齟齬をきたしていないというか，要するに岩本説を受容していくプロセスだと考えていいんですか．

西田　そうですね．つまり在地の資料を見るまでのぼくの農地改革論は，要するに歴研大会で報告したのは，明らかに「農地改革資料」とか「農地改革執務参考」とか，統計資料に基づいて報告しているんです．そのときには『農地改革顚末概要』が通説だったと思うのだけれども，それに基づいているんです．しかし，西塩田を見，五加村を見て，今度，埼玉を見たら，ほとんど確信的に歴研大会で報告した農地改革論のかなり根幹的な部分でまずかったという自己批判はあります．

加瀬　岩本さん，それを聞いてどうですか．高度成長期の農業から見た農地改革原罪論は別にして，戦前とのつながりの問題として．

岩本　ぼくも変わっていると思うんです．（笑）

加瀬　逆に変わっている．交差している．

岩本　農地改革について私は，現在ではその意味をより大きく見るようになっています．その最大のポイントは，農地所有にある社会的義務が伴うということを農地改革が明確に示した点です．むろんこの点が，農地改革の受容者である農民にどこまで受容されたかという点は吟味の余地がありますし，「土地本位制」と呼ばれるような日本資本主義の構造的特長が，高度経済成長下に定着しているプロセスとも関連づけて検討しなければなりませんが．『戦後改革期の農業問題』の特徴は，戦後改革期における農地改革の意義を食糧問題との関連で相対化したという点でしょう．しかし「総括」の章で「戦後改革期の農業問題の中で，問題として質的にも量的にも最大の比重を占めたのは食糧問題であった」（519頁）とまで強調されると違和感があります．日本農業の構造の深部にまでメスを入れた農地改革と，あえて単純化すれば「一過性」の問題に過ぎない食糧問題とは，課題としての重みが決定的に違うと思います．農地改革の意義をこういう形で相対化することには，今でも疑問を持っています．

加瀬　では先を急いで，刊行ほやほやの『高度経済成長期の農業問題』についてお願いしま

す.

5.『高度経済成長期の農業問題』(日本経済評論社, 2000年2月)(執筆者:西田美昭・加瀬和俊・古屋亮・槙平龍宏・永江雅和・山口由等・小塩道子・市川大祐・菅野滋樹)

西田　これは加瀬君とジョイントの大学院の演習を基礎とした共同研究で, ぼくにとって言えば, 3番目の大学院生との共同研究になった. 院生は経済史研究を行っている院生と農業の現状分析を行っている院生と二つのグループから成っていたんです. 大学院生とやった研究はみんな, 結果的には同じだったのですが, 資料はないわけです. 資料を探すところから始めたんです. なかなかよい資料に巡り合わなかったのですが, 最終的にはこれも東村役場の農業構造改善事業関係書類については割とそろっているものがあることがわかって, それを整理する. それから, 農業センサスとか農業基本調査の個表, これは出てくるまで少し時間がかかったんです. これだけ農業構造改善事業関係の書類があるのだから, ほかに資料がないのかということで, だいぶ粘った結果, 裏の倉庫から段ボールに入っている個表がドンと出た. この資料が分析の基礎になったんです. それから, 農業委員会関係の資料も閲覧することができた.

特筆すべきことの一つとして, 村松節夫さんという篤農家の日記を使うことができました. これも聞き取りの最中に「何か書き付けはありませんか」と粘って, バッとわれわれの前に積んでくれたという感動的な場面もありました.

それから, 有名な新平須協同農場は新利根開拓実験農場と言っていた時期もあるんですが, 新利根農場と言えば, 日本全国の協同経営の模範ということで, 1960年代には有名だった. 実はぼくの卒業論文は門外不出の出来の悪いものなのですが,「農業協同化論」という卒論なんです. どこか捜せば出てくると思いますが, そのときに上野満という人とか新利根開拓のことについては知っていて, 多少は書いているんです. 論文を書くときに的場徳造さんなんかのところに行って指導を受けましたから, だから, やっと卒論のときのテーマの資料に出会うことができた.

これは何千人という人の訪れている有名な農場なんですが, 1960年前後には大勢来たけれども, 1947年の最初の出発から1977年の最後のところまで資料をずっと見ようとした人は1人もいなかったわけです. 結局, われわれが最初になって, 協同農場の事務所の跡のところから, 相当痛んでいましたけれども, 資料を見ることができた. それから, 上野満さんの息子さん, 2代目の上野達さんが所蔵していた基本資料を見ることができた. 新利根土地改良区の資料も見ることができたということで, 一応, 資料的にはだいぶ苦労したけれども, 分析に耐えられるものは見つけることができたという意味ではよかったのではないか.

この研究も資料の整理・分析という点ではこれまでの研究とかなり共通していて, どの資料についても, 全員の力で一定程度まで整理・分析して, 最終的に執筆分担者を決める. そういう手続きを取ったことが, 結果的に比較的統一の取れた作品になったのではないかと思います.

この本のぼくが考えている意義なんですが, 高度成長期とそれに続く1970年代までを射程に入れて, 資料に基づき歴史的手法で分析した. この時期の農村を歴史分析の対象として考えてやったという意味では初めての仕事なのではないかという気がしています. それから, 1950年代前半までの舟農業を中心とする低生産力地帯であった東村が, 大規模な土地改良事業によって, 日本でも有数な大規模高位生産力地帯に変化したということを, ビビッドに図なども付けながら明らかにすることができました.

そういう変化のなかで, 1950年代後半から1960年代初期にかけて, 農民の自発的生産意欲が高まる. 農事研究会などが多くの集落にできる. そのことが前提となって, 農業機械化実験集落事業の指定, これは全国で3カ所しかないわけですが, その一つに東村が選ばれる. それから農業構造改善事業の指定も先駆的に行わ

れる．そういうことも明らかにできたと思います．

しかし，この本には「戦後自作農体制への挑戦と帰結」という副題が付いているのですが，1960年代半ば以降になると，農外労働市場の急速な展開という事情もあって，農家の兼業化が進む．それとともに複合経営への挑戦も挫折する．それで稲の単作化が進むというふうに，大局的に見れば，農民の農業生産意欲も低下したということが確認できるのではないか．村松家の分析は，そういう全体の動きを個別農家の日記の記述に基づいて裏付ける有力な分析になっているのではないかと思います．

もう一つは，先ほど言った1960年代の農業協同化ブームのなかで注目された新平須協同農場の全生涯を，一次資料に基づき分析したというのは初めてのことです．そして，その結果，指導者である上野満さんの存在も重要なのですが，それ以上にこの農場の緻密な，当初からの協同経営方針とその実績が30年にわたる協同経営を支えてきた．最終的には1977年に個別経営に分解してしまうのですが，周辺部の酪農経営が多頭飼育に向かう，新平須協同農場の経営的優位が失われるという事態のなかで，結局，個別に分解せざるを得なかったということを実証的に明らかにしました．そういう意味では成立から解体まで，それなりの論理を持って，一応，描ききることができたのではないか．これはこの本のかなり大きなメリットだったのではないかと思っています．

永江　繰り返しになることはあまり言いませんが，今までの研究会の本の話を伺っていて，前の『戦後改革期の農業問題』と『高度経済成長期の農業問題』は特に資料収集が重要だったのではないかと思います．あと西田さんとわれわれメンバーの年齢が開いてきたということもあって，教育的意味合いの強い研究会としての性格が強まっているのではないかなというのが率直な感想です．そもそもこういう研究会がなければ，大学院生が1次資料を自ら発掘する機会が減ってきている現状ですので，そういう機会が与えられたこと自体がすごくありがたかったなというのがまず印象です．

たとえば村松日記の発掘過程ですけれども，本の後書きには西田さんが村松家に行って，単刀直入に資料を見せてくれとお願いしたと書いていましたが，全然そんな感じではなくて，最初はちゃんと話を通して行って，村松さんのお話をずっとうかがって，村松さんが自ら資料を出してくれるように持っていくあたりというのは後ろで見ていてうまいなあと思って，（笑）すごく印象的なんです．

平須の資料に関しても，もともとは東村で平須集落を扱う予定ではなかったわけで，木村六郎さん，江口三男さんといういろいろな聞き取りを重ねていく過程で資料があるのではないかというあたりを付けた．それでもなかなか簡単に見つかったわけではなくて，あんな廃屋みたいなところから出てくるとは，現場にいっていながら想像もできませんでした．

そういう流れもありましたし，平須資料に関しては最後の最後に出てきたのが上野達氏の所蔵資料なんです．この時すでに刊行助成金の交付が決定していて，締め切りが決まっていて，今から出てきても書けないよという空気になっているのですが，西田さんは最後の最後まで粘る．ぼくはあのとき覚えているのですけれども，だれとはちょっと言えないのですが，数名で「ひょっとして書けませんと投げ出せば，1年間延びるんじゃないかな」という相談も本当にしていたんです．（笑）それぐらい追い詰められたのです．そのほか，山口さんが，「学者に何がわかる」とおっしゃる上野達さんに，「研究者にしかできないことがある」と説得して，上野さんから資料を引っ張り出したという話，ぼくは立ち会わなかったのですが，それもすごく印象的です．

とにかく研究の内容もそうなんですが，参加した立場から言わせていただければ，調査の過程を身を持って体験できたということが，なかなか得がたい体験だったのではないかと思っています．

それから，西塩田やその他のことで研究会が楽しかったという話があるのですが，最近の若

手の院生の空気として，あまり専門が違う人と付き合いがなくなっている傾向があるのではないかと思います．農村史をやっていても，積極的に何かしなければ農経の人と知り合う機会がないですし，経済史をやっていて，政治史，思想史の人と付き合う機会，まして大学が違う人と，ということをしなくてもできてしまう部分があります．インターカレッジな研究会であるとか専攻を超えた研究会は昔は当たり前だったのですが，逆に今の若い院生のなかでは，当たり前だったという知識が薄れつつある空気もちょっと感じるときがありますので，そういう経験は今後，生かさなければいけないのではないかと感じました．

研究の内容ですが，現状分析の蓄積の厚い高度成長期を扱ったので，前回の『戦後改革期の農業問題』という本が論点提起型の本だったということがあり，ぼくもそれにすごくインスパイアされて研究を始めた経緯がありましたから，最後の最後までみんな，ぼくだけではなくて，そういう論点提起ができるのかというところで悩んでいたのではないかと思います．特にぼくのような歴史研究者であれば，自分たちの研究の歴史的展望という書き方が可能なのですが，むしろ，現状分析でやっている農経の院生の方たちのほうがそこらへんの悩みは深かったのではないかというのが，一緒に研究していての感想です．

あと研究のペースというか，歴史研究者のほうはある程度，共同研究に時間がかかることに関する意識があるのですけれども，農経の研究者の方はそこらのへんの意識の違いがあって，たいへんだったのではないかなとは思いました．

そのうえでこの本がどういう位置付けになるかというのは，ぼく自身も自信がないところは多々あります．ただ，村松家の資料分析や平須資料は，西田さんがおっしゃったように，リアルタイムで課題が明確なものを扱うという研究スタイルと，後から資料をまとめて見直して再検証するというスタイルの違いが明確にあることは示すことができたと思います．それをまた踏み台に，「これは違うじゃないか」という若手の研究者が出てきてくれればいいのではないかなと，いま考えています．

山口　ぼくは割と後のほうから参加して，資料を探すのに苦労しているところはあまり見ていなくて，続々と出てくるようなところを見ていたんですが，途中で焼かれたりとか，（笑）結構，西田さんが落ち込んだり喜んだりしている様をずっと見ていたんです．結果，それがどう使われたかということで言えば，いま話が出ている村松日記はかなり骨までしゃぶったというような感じで活用しています．平須はさっき話が出たように，後から執筆の段階で急に出てきたりして，もう少し時間があればもっと詰められたんだろうというところがあります．しかし最初から出たにもかかわらず，役場関係の資料とか，土地改良区はそれなりに使ったとは思うのだけれども，一番活用できなかったような気がしています．そのへんが現状とか農業経済畑で研究した人たちとの接点が一番作りやすいような資料だったと思うんです．そこが一番活用できていないのが，これまでの研究書との関係で言うと何をやれるかということで，みんな少し悩んでしまった，あるいはこれからの反応が怖いというふうに言えるのではないかなと思うんです．資料的に言うと，そういう特徴があると思います．

すでに話が出ましたけれども，やっている最中から，現状の人と歴史の人とジョイントをやろうというようなことを西田さんが言っていて，それをかなり意識していました．ぼくは途中から参加していたのだけれども，現状の人は報告している最中は結構おとなしくて，ぼくなんか基本的に都市史をやっていますから，農業のことは素人で，好き勝手なことを言うわけです．それに対して反論を期待しているのだけれども，なかなか反論が出てこないということがあった．それが実際に書き始めると，彼らなりのものを出してくる．それを最初に出してもらえたら，ぼくはそれに何か言いたかったのだけれども，そういうインタラクティブなところはなかったのが，残念と言えば残念です．そのへんは多少，感覚の違いみたいなものを感じて，もっとそこ

をお互いに作り上げるようなかたちになったらよかったと思います．それでも議論の取っかかりの段階はやれたし，その二つの分野の人が集まって書いた本としての成果はちゃんと出しているとは思うんです．

西田さんの役割ということで言うと，当初分析しているころは資料は探してくるのだけれども，実際の分析のゼミなんかでは割と黙っていたような印象がぼくはあります．きょうの会合の最初に聞いた話では，西田さんは学生として現役でばりばりやっているころ，実際に農村に行って，農民の政治行動に対する問題意識があったという話ですが，本の構想の段階ではそういうのを入れようとしたということが今なら理解できるのだけれども，あまりうまくいかなかったし，それはぼくらにはあまりに伝わってこなかったようなところがあると思うんです．そもそも西田さんがゼミのテーマの段階のところで高度成長期を取り上げた意図は，この本でうまく達成されたのかどうかというところをお聞きしたいと思います．

加瀬　私も参加者の一人として発言しますと，いま山口君が言った最後のところとの関係で言うと，この本の最初の原稿としては，序章の第2節，「調査地の性格」の草稿がまとめに入った最初の時点で，西田さんから全員に提示されたんです．それはほとんど変わらずに収録されていますが，これでだいたい全体の論旨のイメージが出てきたという意味では，この本はほかの本にもまして，全体の基調作りに西田さんの理解が規定的であったという感じがします．

それから，まとめの段階では非常に細かく，一人ひとりの原稿を徹底的に読んで，直しを次々に指示する．それこそメールで毎日指示するみたいなところがあったという意味では，非常に指導性を発揮されたという感じがしています．

特に永江君あたりは最後になって次々に出てくる新しい資料をみんな押しつけられて，分担を引き受けるだけでも大変なのに，やっと書いたものを真っ赤に直されることの繰り返しで，よく要望にこたえて，あれだけ短期間にがんばってくれたなという感じがします．

研究史的に見てこの本がどういう評価になるのか，まだよくわからないのですけれども，現状分析分野の先行研究との関係では，ある意味で論点を住み分けたというところがあって，農業生産力の階層別の格差論とか，その格差と労働市場の関係などの問題は資料的に無理だったわけです．ですから，そこのところは避けて，出てきた資料の長所を最大限強調するかたちで動態的に農村像を描いたと言えるのではないか．その限りでは，構造論としては食い足りないけれど，動態論としてはディテールを描きつつ個別経営のミクロな変化と地域農業のマクロな変化をつなぐことができたと思っています．

特に，試験場で技術がどうできるかとか，農業機械がどのように平均的に普及していくかということではなくて，技術が農村に入っていくときの農家側の対応の問題，農家がどういう経済計算と意識でそれを入れていくか．それから全国的に見れば，たとえば，わら加工は数年間かけて緩やかになくなっていくけれども，この村では1966年前後に一挙になくなってしまう．だから，その段階で一挙に冬季の労働の内容が変わってしまう．そういう変化のあり方は全国の趨勢的な変化を地域にあてはめているだけでは，なかなかとらえられないものが得られたという感じがしています．

それから反省点としては，西塩田や五加村と違って，政治史的な部分とのつながりが付けられなかった．当初はそういう分担も設定しており，報告会では選挙分析もやってもらったし，農民運動，青年団運動についても分析の手がかりはあったのですが，それをもう少しできればやりたかったというのはあります．この点を展開できれば，西田さんの戦後農民運動についてのシェーマ，つまり，産業としての農業が衰退していくと，農民運動も衰退していく，産業としてがんばっているときには農民はアクティブであり，選挙でも革新票が多くなるといった理解が，試されることになったと思われます．というのは，この地域の農民は水との戦いを一貫して続けており，治水・排水事業を実現するための極めてアクティブな運動があるけれども，

それは当初から保守党の政治家を自分たちで国会に送り出して国営事業を引っ張ってきて，政治を自分たちの条件のなかで利用するというかたちで展開されていました．こうした点については，できれば誰かが分析を続けてくれないかなと希望しています．

西田　この研究期間は比較的短いんです．ぼくはのんびり，もう少し時間をかけたほうがいいのではないかと思ったのだけれども，加瀬君に強力に言われたんです．現状分析をやっていて，1回調査に行って調査票を持って聞き取りをやって，短期間に報告書を仕上げる習慣がついている人たちを何年も引っ張っていたら落ちてしまう．「これが限度です」と強力に言われて，それじゃあ，一気にまとめなくてはというので，無理してまとめてよかった．確かにあと1年か2年かけていたら，現状出身の人はだれもいなかったという（笑）ことになったかもしれない．

加瀬　これから時間があれば，たとえば平須農場の15軒全部の聞き取りをやって個別経営に分解した後の平須農場の各農家の経営史を明らかにするというような，面白いテーマがたくさんありそうです．そういう宿題をいくつも発見できたという点で，私にも得がたい経験でした．それから，資料的には農協や学校や村内の工場などももっとしつこく当たって何か出てくれば，具体化できる論点がいくつもありそうです．

西田　ぜひ続けてください．

加瀬　今後の課題ですね．

西田　ぼくはこれで最後ですけれども．（笑）

伊藤　『戦後改革期の農業問題』よりも『高度経済成長期の農業問題』のほうが典型的だと思いますが，もともと西田さんの発想は割と運動史というか，最初に加瀬君が統一戦線論が出発点にあると言っておられましたが，それからだんだん農村とか農業とか農家経営，あるいは農村における人的資本の形成というところに広がってきていると思います．

で，そういうことと，いま加瀬君が最後に言った現状の農業分析の人たちがやっているような，たとえば中山間地農業論や請負耕作，小企業経営，あるいはさらに今の新基本法の農業政策，そういった問題と西田さんがやってきた研究との関連付けは西田さんの内部ではどういうふうになっているんですか．

少しずつ動いているような気もするんです．たとえば統一戦線論的に言っても，あるときから，農民は革命的で労働者は反革命的だなんていうようなことを西田さんが言った時期があった．加瀬君が言った農業が発展しているときは農民も元気で，農民意識も割とプログレッシブで，衰退するとちょっと退嬰的になってくるという発想が出てくる背景には，農家経営なり，農村の経済構造なり，そういうものがきちっと内在化されないと運動のほうも見えないというのがあったと思うんです．

それがだんだん農家経済なり，農家経営なり，農産物ルートなりという経済過程そのものを分析の対象にするところまでいく背景にあったのではないか．ただ本当にそこに突っ込むというふうにはなかなか成り切っていないような感想も持ちますが．

西田　「言った時期があった」だけでなく，実は書いてもいるんです．「戦前日本における労働運動・農民運動の性質」という論文のなかで，農民運動のほうが左翼的で，労働運動のほうがすぐ右傾化してしまうのはなぜか．それは地主・小作関係のあり方，あるいは農民経営のあり方と労働者家族の生活構造の違いというシェーマを出したことがあります．

ぼくの関心は1997年に出した本のなかで典型だと思うのだけれども，農民経営と農民運動と農民の政治意識，この三者の関連をどういうふうにとらえるのか．『高度経済成長期の農業問題』のなかでも十分，加瀬君が言われたとおり，生かすことはできなかったけれども，今までやってきたそれまでの共同研究の全体から，ぼくが学んだというか，吸収したということはたぶんそういうことではないのかなと思います．それでぼくの本ができた．

『高度経済成長期の農業問題』，いま問題になっているこの本については，確かにそういう点

でいろいろ不十分な点が残っている．しかし，課題が大きく残った本は割といい本かもしれない．（笑）

加瀬　というところで，次に移りたいと思います．社研時代の西田さんのお仕事のなかで，これまで議論した共同研究以外で，思い出に残っているものについてふれていただいた後，残された時間を全体討論に使いたいと思います．

6．その他の仕事のいくつかについて

西田　まとめて二つのことについて．一つは『西山光一日記』と『西山光一戦後日記』，2冊作ったわけですが，これはぼくにとっては非常に大きな意味を持ったものです．この日記を見つけたのは1979年で，『西山光一戦後日記』を公刊したのが1998年ですから，ちょうど20年かかってやったわけです．これは，今年4月に亡くなったのですが，久保安夫さんがいなければ成り立たなかった仕事です．久保さんに頼まれてやった『西蒲原土地改良史』という仕事をやっているときに見つかった資料で，今まで農民の日記で有名なのは『善治日誌』がありますが，『善治日誌』は読んでいただけでは社会の動きはよくわからないところがあるんですけれども，『西山光一日記』は，それ自身読んでいくと，その時代が見えてくる．そういう種類のものでした．

1925年からこの日記は始まっているのですが，1920年代から1990年代の初めごろまで書いていますので，今日に至るまでと言ってもいいと思うんですが，ぼくにとってはこの日記の編集をしている過程で，農業問題を考え分析する際にはこの日記が常に背景にあった．たとえばどういうことかというと，「農民運動の高揚と衰退」という論文を1994年に書いていたのですが，このときにはすでに『西山光一戦後日記』の編集をしているんです．しかし，まだ出ていないから，これは利用できないというかたちで利用していないのですが，1960年代から70年代にかけての地価の高騰というなかで，農民の農地に対する見方が変化してきて，結局，財産として見るというか，その過程で保守政治家との結びつきが非常に強くなった．高橋清一郎という自民党の代議士とのつながりとか，県会議員とのつながり，市会議員とのつながり，いわゆる開発と政治に西山さんが深くコミットしていく．

1950年代まではそういうことはない．1950年代までは一農業者として，耕地整理とかいろいろなことでがんばっている．そのときには保守政治家との結び付きは全くない．そういうことが背景にあって，地価が高騰し，農民の開発志向が進むと，農民は保守政治家と結び付くという筋書きが後ろにあって，それでこの論文を書いているというところがあったと思います．

そのほかにも農地改革の，西塩田でも五加村でも埼玉でもやったあのイメージと，『西山光一日記』のなかに出てくる自作農創設運動とはダブるんです．かなり地主的土地所有と地主経営のほうが追い詰められていて，そのなかで農民が所有権を要求する．それが農地改革につながっていく．そういうことも含めて，『西山光一日記』の編集はぼく自身の個人研究にとっても大きな意味を持ったし，共同研究でのいろいろなイメージとも合致するというか，逆にこの『西山光一日記』を編集することによって，必ずしも間違ったことを言っていたわけではないんだと，勇気付けられるようなところもあったのではないかと思います．

もう一つは『障害者問題研究』ですが，これは全く偶然というか，うちの娘は聴覚障害者で，連れ合いはリューマチ，初めは大したことはなかったのですが，そういうこともあって，障害者問題については現実的な関心を持たざるを得なかった．しかし，障害者問題研究を自らの研究分野にするということは一度も考えたことはなかったわけです．ところが，社研でいま全所的プロジェクト研究と言っていますが，全体研究の「福祉国家」というのが組織されるなかで，ちょうどぼくがアメリカへ行っているときと重なるのですが，岡田与好さんや戸原四郎さんからの強い勧めというか，「君が障害者問題につ

いて書かなければ，だれが書くんだ」ということもあって，「近代日本における障害児教育の特質」という論文を書くことになりました．

そのとき障害者問題研究について多少のサーベイをしたのですけれども，この分野の研究は制度解説か現場のレポートが圧倒的に多いんです．それで全体として，歴史的に分析するものが少ないので，苦労したのですが，それだったら，ぼくの歴史的研究手法というか，とりわけ自分の専門である経済史的研究手法を積極的に持ち込んで，ひと味違う研究をしたらどうかということでやりました．

その結果，基本的なデータの整理がたいへんだったのですが，データの整理をして，時系列に並べてみる．それから，ほかの資料もいろいろ使ったのですが，一番大きな発見だったのは，障害児教育と一言で言っても，障害児教育の発展のしかたには，障害の種類によって，学校の設立状態や運営状態なども含めて，盲聾教育が先行して，他の知的障害とか病弱とか肢体不自由という教育は著しく遅れている．これが表面的に見られる一つの特徴なんです．

それでは，そういう特徴はなぜ出てきたのかということでいろいろ見ていくと，結局，明治初期からそうなんですが，障害児教育をやっていく場合の理念は，しょっちゅう出てくる言葉ですけれども，「無用を転じて有用となす」というものなんです．無用と思われた障害者を有用な人にする．「国家のために」というのがまた付くんですが，国家のために有用な人にする．こういうのが基本的な思想になっているわけで，そういう障害児教育観に規定されて，一番簡単に役に立つというか，盲聾教育が先行して，どんなに「転じて」も有用とならない分野は遅れる．日本的だとは必ずしも言えないのですが，そういう障害児教育の特質を探し出すことができた．

その後も京都府盲唖院の明治初期の就学保障についての研究とか，戦後の障害者福祉政策と1980年代の見直しについての分析もやりましたが，結局，この研究をぼくは中断しました．中断したというのは，連れ合いのリューマチが悪化したために障害者問題研究どころではなくて，障害者福祉そのものの現場に多くの時間を割かなければならないということになりました．ぼくは本当は二足のわらじをはきたかったのだけれども，結局，農業史研究を取って，障害者問題研究のほうはちょっと別にするというかたちになった．機会があったら，再開したいと思います．

7. 全体をふりかえって

加瀬　残された時間で全体にわたる議論を出していただきたいと思います．この際，聞いておきたいこと，言っておきたいこを自由に発言して下さい．

大門　ずっと聞いてきた印象で，あるいは以前からの実感でもあったのですが，共同研究についてこれだけ話を聞くと，大きかったのはインターカレッジでずっとやってきたということだったと思います．ゼミが共同研究に移行したというのも，もちろんいくつかあったわけですが，その場合でも単位に関係なく，他大学，他学部，他分野の人が加わって，共同研究を行うということが，西塩田以来，ごく当たり前にというか，継続的にずっと行われてきた．最初から加えれば二十何年ぐらいになるんでしょうか．

ぼくにとっての社研のイメージはとにかく共同研究，社研に来るときは，そういう関係で足を運ぶ．共同研究の場としての社研というイメージがずっとあって，それが今後も継続されることを心から希望しているんです．

ぼく自身はインターカレッジの共同研究の機会が持てれば，ぜひそういうことを継続してやりたいなと思っているんですが，今までの西田さんの共同研究のスタイル，ないし西田さんの研究方法に即して考えると，学ぶべき点と，それからもう少し違う方法が考えられてもいいのではないかなと思っています．

一つは書評でも書いたのですが，農家経営に即して問題を立てるという点では，西田さんは最初から一貫していると同時に発展しており，

その点で学ぶべきところはすごく多くあると思っています．西田さんと言えば，農民的小商品生産論ですが，最初の論文のタイトルに小農経営の発展とあるように，農家経営論だったわけです．西田さんは先ほど言われた労働運動との比較で，農家経営のあり方，農民的小商品生産のあり方の意味を再発見する．西田さんが言われたように，農民運動の基礎に農家経営があるというのは，ぼくはかなり言えるのではないかと思うんです．

その場合に農家経営，運動，政治という三つの関連の付け方に問題があります．選挙とか組合運動というかたちで出てくる政治の領域がもちろんあると思いますが，政治の領域が非常に狭い意味で設定され，農家経営のあり方と関連づけて考察されています．今の時点から振り返って，農家経営と運動ないし政治の関連のつけ方を考えてみると，政治の領域自体をもっと広く取って考え直す必要があるのではないか．

これは先ほど北河さんが言われた点と関係してくると思うんですが，実際にはもっと様々な運動，あるいは日常性というか，そういうことがあったはずで，そういうところにいろいろな政治がかかわっていたはずだと思うんです．政治の領域を広く取ることによって，農家経営のもつ意味も今までとすこし違って見えてくるのではないか．

ぼく自身，いま四苦八苦して，農家経営について考えているのですが農家経営と運動・政治の領域をどうつなげるかという点で，運動が高揚して終わっていくというかたちとは違う，いま現在農村が抱えている問題にまでつながるような描き方ができないかなと思っているんです．

そういうことを考えると，共同研究の方法それ自体についての工夫も必要になってくるのかなと思っています．資料に徹底して即しながら，しかし，今までと違うかたちを追究するということができないかなと考えています．

西田　言われることはよくわかります．ある方からわれわれの本について手紙でコメントをいただいたのですが，資料のあるところについては徹底的に説得力のある分析をしているけれども，聞き取りとか，そういう手法も駆使してやれば，もっと広がりのある分析になるのではないか．たとえば政治と言っても，何も農家は農業政策にだけ反応しているわけではなくて，様々なことについて反応している．今の現時点の農家で考えれば，様々な人間がいるわけです．女性も男性も含めて，様々な職業に就いている．何も農業だけやっているというのではなくて，ほかのことをやっている人もたくさんいる．その人たちがいったい何を考え，何を目指しているのか．もちろん一次資料は使うけれども，そういうことも含めて，政治の問題も考えることをしたほうがいいのではないか，ということを考えています．

伊藤　西田さんの一連のこういう共同研究が次々に結実してきた背景に，西田さん自身の論文を執筆するスタイルがあると思うんです．日常話したり，議論しているときは，あまりアカデミックではない場合が多いと思うのだけれども，（笑）論文自身はものすごく厳格にアカデミックフォームで書く．西田さんはかなり若いときから，そういうスタイルだと思うんです．課題の設定があって，その課題の設定に見合うかたちで実証分析があって，設定したことについて，必ず結論を書く．こういうフォームがかなり若くからあって，それがある意味では強制力になって，次々に若い連中や院生などでこの共同研究がまとまっていく．

そういうフォームから言うと，いま西田さんが自己批判したような領域は，今のフォームを維持していくと，なかなか書きにくいと思うんです．それは西田さんのある面では禁欲主義というのもあったと思うのだけれども，ぼくはそれはかなり昔から，非常にスマートで，読んでいて論文としての完成度が高いけれども，次にどういうふうに広がっていくかというときの問題としてあるかなと思いました．

もう一つ，これは最初の岩本さんの西田さんに答えてほしいという問題提起に絡むのだけれども，西田さんたちの共同研究は問屋制家内工業か，よく言ってマニファクチャー段階だったのではないか．今の経済学の研究スタイル，あ

るいはもうちょっと広い範囲でもいいのですが，特に若い人たちは有用性や効率性を優先して研究テーマを選ぶ傾向が強くなってきているように思います．それは勿論，就職とか学界とか外的状況に規定されている面が大きいのですが．そうすると，そういう状況にある中で西田さん的なスタイルの共同研究をこれから続けてやろうといったときに，かなり難しい面もあるのではないかと感じています．

西田さんは新しい共同研究のスタイルを作り出したと思うのだけれども，今の段階で，それはぼくらの課題になるかもしれないけれども，どういうかたちの共同研究のスタイルがあり得るのかということを改めて考えないといけないなと，きょうの話を聞いていて思いました．

加瀬　この本の後書きに，共同研究が引き継がれることをぜひとも期待すると書いておられますので，皆さんそれぞれがその期待にどう応えるかという立場に立って，共同研究の難しさ，それをどんなふうに克服していけるかといった点を話し合ってみたらと思います．大門さんは森さん達とその後も共同調査をやっておられるんですか．

大門　今はもうやっていないです．

伊藤　共同で本を出したり，そういうのはいっぱいあるのだけれども，最近はシンクタンク的なスタイルが多くなっているわけでしょう．農業経済の現状の人たちの委託研究なんかはそうだと思うし，加瀬さんが漁業経済，漁協・農協でやられる委託調査はそういうスタイルだと思うんです．そうではないスタイルを探さなければいけないのだけれども．

加瀬　ただ，市町村史とか，あるいは現状の農村調査でそういう方向の共同研究があるのではないですか．単年度の委託調査ということになると，どうしても1－2回行って，2泊3日ぐらいでまとめなければいけないような格好になるけれども，論点を詰めていく努力はかなりされているのもあるのではないですか．

岩本　現状分析の分野では，この本のように資料を網羅的に収集・吟味して，構造の全体を問題にするという類の仕事は，最近はあまり出てないように思いますね．その意味では農業経済の院生には，できるだけ武者修行に出るように勧めています．社研をまず第一の修業先として．それから最後の本は，院生との共同研究という意味では3冊目ですね．そして扱う時代が下がってきているわけです．これは院生の関心に沿ったのか，西田先生にある意図があったのか．最初に出した問題との関連でいうと，西田先生ご自身のやりたいこと，問題意識の変化が一方にあり，他方に教育的観点から共同研究を組織するということがある．この両者の関連が共同研究の中でどう統合されていたのか，というのが今回の座談会で私が一番知りたかった点ですね．

西田　一つだけ，個人研究と共同研究の関係ですが，ぼくは割と幸せだったのではないかと思います．それほど自分の研究を禁欲して教育的にというのではなくて，共同研究のなかでぼくがいただいたものがすごく多かったし，それが次のぼくの個人の論文に生かされていく．そういうインタラクションがずっとここのところ続いてきて，そういう意味では矛盾しない．その関係は非常に幸せだったと思います．むしろ共同研究がなかったら，ぼくの本はまとまらなかった．簡単に言うと，そういう関係だったと思います．

また，テーマとして扱う時代が順に下がってきているという点については，ぼく自身の研究関心の推移というか，変化が大きく関係していると思います．もともと1960年代の農民意識が保守的な部分が大きいのは何故かという疑問が研究の出発点でしたから，やっと当初の問題関心の時期に戻ったということでしょうか．いずれにせよ，ぼくの場合は歴史をさらに遡って，そのルーツを探るという方向ではなく，現状の問題を見据えながら，歴史的分析を行うというスタンスをとっていたことが，扱う時期が下がってきていることと関係していると思います．

加瀬　戦前の農家経済・農民運動の推移についての西田さんの把握では，農民内部の経済的な階層差とそれによる政治的・社会的な行動様式の相違が非常に重視されています．しかし戦

後，特に農地改革後のイメージでは，それが大きく変わって，農業という産業のあり方が直接問題になり，産業として農業がいい時代と，産業として展望を失った時代，その時に農民層の意識，行動は変化するというふうに理解されています．

そこのところは客観的にそういう変化が起こってくる一面が確かにあるとは思うんですが，そこに西田さんのとらえ方として，農民的な社会としてのある種のまとまりのようなものが運動，社会関係を決めているんだという，そういう側面が戦後については実感として強くなっているのでしょうか．

西田　現在のように農業が産業としての展望を失いかけている状態というのは，個々の農家にとっては一部を除けば大多数が展望を見出せていないということだと思います．このことは，農村生活の根幹部分であった共同性を破壊していく方向に作用していますから大問題でしょう．

一方，農村における階層差の問題は，こういう状況の下でも無視できないと思います．経営規模を拡大しながら一生懸命がんばっている人たちは農政に対する批判もあるし，政治に対する関心も高い．しかし，兼業化が進んで，そんなに経営規模も大きくないというところではかえって保守的になる．そういう意味では戦前から戦後にかけての階層差を重視する分析から，産業としての農業という分析に変わっていくというよりは，両方をにらんでやっていきたいということです．

加瀬　西田さんの今後の共同研究・個人研究の構想など，話題にしたいテーマも残っていますが，時間がまいりましたので，一応これで閉じさせていただきます．長時間，ありがとうございました．

〈座談会参加者〉（発言順）

西田美昭	東京大学社会科学研究所・教授
加瀬和俊	東京大学社会科学研究所・教授
鈴木邦夫	電気通信大学電気通信学部・教授
岩本純明	東京大学大学院農学生命科学研究科・教授
北河賢三	早稲田大学教育学部・教授
清水洋二	拓殖大学政経学部・教授
伊藤正直	東京大学大学院経済学研究科・教授
大門正克	都留文科大学文学部・教授
安田　浩	千葉大学文学部・教授
川口由彦	法政大学法学部・教授
花井俊介	早稲田大学商学部・助教授
永江雅和	専修大学経済学部・講師
山口由等	都立大学経済学部・助手

記　事

西田美昭 教授　略歴・著作目録

略　歴

1940年10月29日	生まれ
1964年3月	横浜国立大学経済学部卒業
1969年3月	一橋大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学
1969年5月	一橋大学経済学部助手
1971年5月	高崎経済大学講師
1974年4月	東京大学社会科学研究所助教授
1981年6月～82年8月	ハーバード大学イエンチン研究所客員研究員
1986年1月～3月	デリー大学中国・日本研究科客員教授
1986年12月	東京大学社会科学研究所教授
1989年3月～8月	オックスフォード大学日産日本研究所客員教授
1994年10月～12月	ミラノ大学政治学部客員教授
1999年5月～8月	ミュンヘン大学日本研究センター客員講師

著作目録

1. 著書

(1)『日本地主制の構成と段階』(永原慶二・中村政則・松本宏と共著) 東京大学出版会, 1972年.

(2)『昭和恐慌下の農村社会運動』(編著) お茶の水書房, 1978年 (東京大学社会科学研究所研究報告第27集).

(3)『栗原百寿農業理論の射程』(森武麿・栗原るみと共編著) 八朔社, 1990年.

(4)『近代日本の行政村』(大石嘉一郎と共編著) 日本経済評論社, 1991年 (東京大学社会科学研究所研究報告第44集).

(5)『西山光一日記』(久保安夫と共編著) 東京大学出版会, 1991年.

(6)『戦後改革期の農業問題』(編著) 日本経済評論社, 1994年 (東京大学社会科学研究所研究報告第51集).

(7)『近代日本農民運動史研究』(単著) 東京大学出版会, 1997年 (東京大学社会科学研究所研究叢書第88冊).

(8)『西山光一戦後日記』(久保安夫と共編著) 東京大学出版会, 1998年.

(9)『高度経済成長期の農業問題――戦後自作農体制への挑戦と帰結――』(加瀬和俊と共編著) 日本経済評論社, 2000年 (東京大学社会科学研究所研究報告第61集).

2. 論文

(1)「小農経営の発展と小作争議」『土地制度史学』第38号，1968年.
(2)「小作争議の展開と自作農創設維持政策」『一橋論叢』第60巻5号，1968年.
(3)「農民闘争の展開と地主制の後退」『歴史学研究』第343号，1968年.
(4)「零細農耕と地主的土地所有」『一橋論叢』第63巻5号，1970年.
(5)「小作争議の展開」古島敏雄・和歌森太郎・木村礎『郷土史研究講座』第7巻，朝倉書店，1970年.
(6)「独占資本主義の確立と地主制の動揺」(松元宏と共同執筆)『講座・日本史』第7巻，東京大学出版会，1971年.
(7)「戦後農政の基調と労農同盟論」『歴史評論』第255号，1971年.
(8)「農地改革の歴史的性格」『歴史学研究』別冊特集号，1974年.
(9)「農民運動の発展と地主制」『岩波講座・日本歴史・近代5』岩波書店，1975年.
(10)「第一次大戦後の民衆運動」『日本民衆の歴史』第8巻，三省堂，1975年.
(11)「昭和恐慌期における農民運動の特質」東京大学社会科学研究所編『ファシズム期の国家と社会Ⅰ　昭和恐慌』東京大学出版会，1978年.
(12)「労農運動の発展」高橋幸八郎・永原慶二・大石嘉一郎編『日本近代史要説』東京大学出版会，1980年.
(13)「自作農創設維持政策の歴史的性格」葉山禎作・阿部正昭・中安定子編『伝統的経済社会の歴史的展開』上巻，時潮社，1983年.
(14)「日本地主制における西服部家の位置」大石嘉一郎編『近代日本における地主経営の展開』御茶の水書房，1985年.
(15) "Agrarian and Peasant Problems in Japan, 1918-1950" Heiji Nakamura (ed.) *Transformation and Peasant Movements in Contemporary Asia*, Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 1985.
(16)「近代日本における障害児教育の特質」東京大学社会科学研究所編『福祉国家6　日本の社会と福祉』東京大学出版会，1985年.
(17)「盲聾教育形成期における就学保障の展開――京都盲唖院の『発展』と『挫折』――」『社会科学研究』第37巻第4号，岡田与好教授還暦記念号，1985年.
(18) "Food Supply and Reorganization of Rural Community in Japan, 1937-1945"（大石嘉一郎氏と共同執筆）Annals of the Institute of Social Science, No. 27, 1986.
(19)「農民運動と農業政策」大石嘉一郎編『日本帝国主義史Ⅱ』東京大学出版会，1987年.
(20)「『福祉見直し』と障害者福祉政策の動向」東京大学社会科学研究所編『転換期の福祉国家』下巻，東京大学出版会，1988年.
(21) "Growth of the Meiji Landlord System and Tenancy Diputes after World War Ⅰ: A Critique of Richard Smethurst, Agricultural Development and Tenancy Diputes in Japan, 1870-1940" Journal of Japanese Studies, 15 : 2, 1989年.
(22)「リチャード・スメサースト氏の日本農業史研究を告発する」『土地制度史学』127号，1990年.
(23)「戦前日本における労働運動・農民運動の性質」東京大学社会科学研究所編『現代日本社会4　歴史的前提』東京大学出版会，1991年.
(24) "Reflections on Land Reform in Japan" Bruce Koppel, D. Young Kim (ed.) Land Policy Problems in East Asia――Toward New Choices, East West Center and Korea Research Institute for Human Settlements, 1993.
(25)「農民運動の高揚と衰退――戦後農村社会への転換――」『シリーズ日本近現代史　構造と変動』岩波書店，1994年.
(26)「戦時下の国民生活条件――戦時闇経済の性格をめぐって――」大石嘉一郎編『日本帝

国主義史Ⅲ』東京大学出版会，1994年.
(27) "The Rise and Decline of the Farmers' Movement and Transformation of the Rural Community in Postwar Japan" (Occasional Paper in Labor Problem and Social Policy, No. 19, September 1994).
(28) "Labour and Farmers' Movements in Prewar Japan" Junji Banno (ed.), The Political Economy of Japanese Society, Vol. 1, The State or the Market? Oxford University Press, 1997年.
(29)「農地改革と農村民主主義」南亮進・中村政則・西沢保編『デモクラシーの崩壊と再生一学際的接近』日本経済評論社，1998年.
(30)「戦後改革と農村民主主義」東京大学社会科学研究所編『20世紀システム5　国家の多様性と市場』東京大学出版会，1998年.

3. 調査報告

(1)『都市農業と農地制度——横浜市神奈川区の野菜・植木作地帯の実態——』農政調査報告，1970年.
(2)「群馬県勢多郡旧芳賀村役場史料・旧桂萱村田村家文書・旧桂萱村役場史料から——戦時下農村支配構造の解明のために——」高崎経済大学『産業研究所所報』第9号，1974年.
(3)「限界地過疎地帯の場合——福島県西会津町の実態——」『不作付地の発生要因とその有効利用対策に関する調査研究報告書』財団法人農政調査会，1976年.
(4)『東松山市域における手作地主経営の展開』(村木久美子氏と共同執筆) 東松山市史調査報告書，第18集，1979年.
(5)「地主制下の農業生産力と農民層分解」(品部義博氏と共同執筆)『西蒲原土地改良史』上巻，1981年.

4. 資料集編纂

(1) 新潟県大地主所蔵資料第7集『千町歩地主原田巻家の構成』のうち，第2編「土地所有の構成と地主経済」1965年.
(2) 新潟県大地主所蔵資料第8集『二宮家の地主構成』のうち，第2編「土地所有の構成と地主経済」1966年.
(3) 新潟県大地主所蔵資料第9集『今井家の地主構成』のうち，第2編「土地所有の構成と地主経済」1967年.
(4) 農地制度資料集成編纂委員会『農地制度資料集成』第2巻（小作争議）のうち，「蜂須賀農場争議」「前田村小作争議」1969年.

5. 書評

(1) 金原左門著『大正デモクラシーの社会的形成』(青木書店)『歴史学研究』第338号，1968年.
(2) 暉峻衆三著『日本農業問題の展開』上，(東京大学出版会)『日本読書新聞』1547号，1970年.
(3) 大橋隆憲編著『日本の階級構成』(岩波書店)『歴史学研究』第390号，1972年.
(4) 東京大学社会科学研究所編『戦後改革6　農地改革』(東京大学出版会)『社会科学研究』第27巻第2号，1975年.
(5) 大江志乃夫編『日本ファシズムの形成と農村』(校倉書房)『日本史研究』第209号，1980年.
(6) 安田常雄著『日本ファシズムと民衆運動』(れんが書房新社)『社会経済史学』第47巻第2号，1981年.
(7) Edited by Najita and Koschmann "Conflict in Modern Japanese History" Princeton University Press, 1982, The Journal of Japanese Studies, Vol. 11, o. 1, 1985.
(8) 森武麿編『近代農民運動と支配体制』(柏書房)『史学雑誌』第95編第6号，1986年.
(9) 野田公夫著『戦間期農業問題の基礎構造

――農地改革の史的前提――』（文理閣）『日本史研究』343号，1991年.
(10) 赤松力著『近代日本における社会事業の展開過程』（御茶の水書房）『土地制度史学』1992年.
(11)大栗行昭『日本地主制の展開と構造』歴史科学協議会『歴史評論』1998年11月号.
(12) 島袋善弘著『現代資本主義形成期の農村社会運動』（西田書店）『土地制度史学』第163号，1999年.

6. その他

(1)「農地改革」『日本史を学ぶ5』有斐閣，1975年.
(2)「農民運動――その歴史と現状――」『農業協同組合』第22巻10号，1976年.
(3)「昭和恐慌期における農民運動の性格」土地制度史学会編『資本と土地所有』農林統計協会，1979年.
(4)「日本にとってのアメリカ農業――アメリカ農村で考えたこと――」『教科研究・社会』第54号，学校図書，1983年.
(5)「国立大学教員の賃金水準」『賃金と社会保障』892号，1984年.
(6)「第一次世界大戦と地域社会の変動」「昭和恐慌下の地域社会」「戦時体制下の町と村」『東松山市の歴史』下巻，1986年.
(7)「デリーのろう学校」『障害者問題研究』第49号，1987年.
(8)「アメリカの聴覚障害者」全国障害者問題研究会『みんなのねがい』No.237，1988年.
(9)「インドの障害児教育」全国障害者問題研究会『みんなのねがい』No.238，1988年.
(10)「転期に立つ大学――イギリスと日本――」大崎会『会報』9号，1990年.
(11)「解題――雨宮謙著『山梨県窪中島部落に於ける農民運動の基礎的解明』」（林宥一氏と共同執筆）『日本史研究』329号，1990年.
(12)「『西山光一日記』――その出会いから出版まで――」『UP』219～221号，1991年.
(13)「スメサースト氏の一文を読んで」『歴史学研究』654号，1994年.
(14)「もう一つの本郷――石井昭示著『近代の児童労働と夜間小学校』を読む――」『本郷』No.6，1994年.
(15)「戦後農政と農村民主主義――新潟県の一近郊農村を事例として――」『農業法研究』32号，1997年.
(16)「農民記録『西山光一戦後日記　1951-1975年』」東京大学出版会『UP』309号，1998年.
(17)「近代日本農民運動史研究と林宥一氏」（金沢大学経済学部『CURES』No.51，1999年12月）2-5頁.